

(雪は小降りとなる。遠くから月琴の調べがきこえ、おひおひ近づく、店の前に来る。年老いたる盲人の男、小さな女兒を伴ふ。女の兒入口より入る)

女の兒。(盲人の弾く月琴に合して唄ふ)

……お前さんとならばどこまでも、日光の華嚴のお瀧の中までもどこいとやせぬかまやせぬ、華嚴のお瀧はまだおろか、浅間山噴き出す煙の中までもどこいとやせぬかまやせぬ、噴き出す煙はまだおろか……

みや子。(ストーブを閉めて) お入り、雪が降つてゐて大へんでせう。

女の兒。雪は大分小降りになつてゐます。——少しあたた煖らして下さいませ。

男二。法界屋ぢやないか。中へはいつて、何か唄ふといふ。

女の兒。はい。(男と女兒はいり来る)

男二。今やつてゐるのをやつておくれ。

法界屋。へえい。(ストーブの傍により、琴を弾す)

……噴き出す煙はまだおろか、南洋の人喰ひ土人の中までも、どこいとやせぬかまやせぬ、人喰ひ土人はまだおろか……

男一、二。(合唱)

……あふりかの吹きくる沙漠の中までも、どこいとやせぬかまやせぬ。吹きくる沙漠はまだおろか……

男一。みや子さん、あなたも唄つたらどうです。

みや子。わたしは、唄へませんの。(半ば獨言)ほんとに、歌を唄へなくつてから、ずる分年月が経つこと。

男二。みや子さん、唄つて下さいな、え、いぢやないか。

みや子。(涙含み)わたし歌なんか唄へませんの、なんだか、かうして聽いてゐますと、悲しくつて淋しくつて、泣きたくなつてきますのよ。

男二。唄ふ代りに泣かれちややり切れませんね。

……浅間山ふき出す煙の中までも、わしやいとやせぬかまやせぬ、ふき出す煙はまだおろか……

(この時、戸外から労働者三人、戸を明けようとする)

みや子。誰あれ、源一さんですの。

労働者一。 おみやさん、今晚は、大さうにぎやかなやうですな。

(三人入り来り、ストロアの右手の卓子にすわる)

みや子。 いらつしやいまし。源さんかと思つたの、大さうな雪ですわね。

労働者一。 え、たうとうこんなに積りやがつて、歩きにくくつてしようがありませんや。——  
ふむ、それぢや源さんはまだ見えないやうだね。

みや子。 はい、今夜はどうしたのか。歸りが遅いものですから、わたし心配してをりました。もしや、何か變つたことでもできたのぢやないかと思ひましてね。

労働者一。 うむ、別に大したこともないんだが、今夜は源さんは一寸、俺達の罷工の方の用事が出来て遅くなることはなるのだが、それにしても、もう歸つて来なくちやならないわけなんだ。今夜の九時には、此家へ集まつて、源さんからの返事をきく約束になつてゐたのだ。

みや子。 今朝。出がけに晩くなるやうに申してはゐましたが、何分、今度のやうな大事の際なものですから、さつきから一人で心配してゐました。でも皆さんがいらつしやつてわたしも心丈夫に存じますわ。——何を召上りまして。

労働者一。 熱いのを持つて来て下さい。なあに、心配しなくともい。大したことはありやしないから。

みや子。 え、どうぞ、ごゆつくり。そのうちに廣野もかへつてくることでせうから。  
(みや子ストロアの横を過らんとす。男一、とゞめる)

男一。 大さう深いおなじみのやうですな、何を話してゐたのだ。

みや子。 お銚子の御註文なの。

男一。 何んだかあやしいものだぞ。——この頃は労働者も隅におけないからね。

みや子。 何をいつてらつしやいますの。

男一。 まあ、そこへお坐りなさいといつたら坐つたらいいだらう。

みや子。 いえ、今、一寸、用事があるのよ、ほんとに一人だものだから人手が足りなくて失禮しますわ。御免遊ばせ。

男一。 さう云はないで、ま、坐りたまへといつたら——(みや子の頸すぢに手を巻き引きよせる)ね、

みや子。 いけません、いけません。あなたは酔つていらつしやるのよ。

労働者二。 おい、若僧！ ふざけた真似をするのは止せ。

男一。 何んだ。

一九六

労働者二。 その手を離せと云ふんだ。何といふザマをしてやがるんだ。お前達ばかりが客ぢやないんだ。でくの棒のやうにのらくらと、親から金をしほり取つて、値段を知らねえ米でふとりやがつて、ふざけるのもいゝ加減にしろ。ううん、早くかへつて勉強でもするがいいんだ。(つかつかと歩みよる)

男一。 何んだ。

労働者二。 その手を離せと云ふのだ。

男一。 お前達の指圖を受ける覚えはない。

労働者二。 何んだ！ (男一の胸倉をとり、腕をねぢ上げ、みや子を離さず、男二、立上る、労働者二、男一、二をその土間にたゞき伏せる)

労働者一。 おい止しねえ、止しねえ、つまらない若僧を相手にするな。——どこの書生さんだから知らねえが、早くかへつた方がよからうぜ。

男一。 (起き上る) ふむ、今夜は黙つてかへつてやる。覚えてゐろ。(まつきから、寒さうにストリアの前につくばつてゐた法界屋に) おい、これをやるぞ。

法界屋。 ありがたうございます。

男一。 (傍に悲しさうに立つてゐるみや子に) 勘定はいくらだ。

みや子。 二圓八十錢でございます。

男一。 なに、——つりはいゝんだ。それでいゝんだよ。(男二に) かへらう。

男二。 うむ。

男一。 向うは命知らずの、自暴氣味の労働者共だ、黙つてかへつてやらう。はつはつ今に見ろ、一人残らずふんじばつてやるから。(戸外へ出る、雪しきりに降り出す) ——おゝ、大さうな雪だぞ。

(男一、二去る、労働者二人沈黙、みや子奥へ去る、しばらくは静寂、盲目の法界屋月琴をとりて口ずさむ)

法界屋。

(低聲に) ……わが戀は、細谷川の丸木橋、渡るに恐し。渡らねば、思ふお方に會はれやせぬ……(くり返し) わが戀は細谷川の丸木橋、渡るにや恐し、渡らねば……

労働者一。 廣野君はどうしたのかな。まさかに、ひよんなことになつて、莊田の家で直ぐに引つばられていつたわけでもあるまいね。

労働者三。 莊田社長の家で直ぐに引つ張られてゆくほどの態度に、廣野君が出れたのなら、廣野君のためにも、俺達のためにも實にこんな目出度いことはないのだが、どうもさうではないらしい。殊によつたら、警察へ引つばられてゆくどころか、正反對に、——いや止さう、縁起でもない。

労働者二。 うむ、俺もそのことはかねがね心配してゐたのだ。まさかとは考へるけれど、廣野君だつて神や佛ぢやない、生きた人間であつてみれば、いざとなれば、妻や兄妹に未練も残る、どこで、どんな風に、心がうつり變りするか知れたものではないのだから。——さう言はれてみると、俺もさうでないかと考へないわけにはゆかない氣がする。

労働者一。 どうだと言ふのだ。廣野君がどうかしたとでも言ふのか。

労働者二。 いやね、別にどうといふのでもなければ、心變りをしたのではないか、俺達三百人同志の誠意と期待を裏切つたのではないか、といふわけではないけれど、しかしかう歸りの遅いことや、今日のあの自分から言ひ出しておきながら、何となく社長の宅へゆくのを進まなかつたことや、さらに、俺達が、今度の同盟罷工を實行することに評議一決して、實行した後ちのこの四五日間の廣野君の惱ましい様子と云ひ、いよいよ、社長が要求を容れるかどうか、今日

社長の宅へ俺達代表委員五名のものが全部、ゆかうとした時に、いや、それでは、もし一舉にしてあげられた場合、次の直接行動をやるのに不便になるのをどうするか、と言ひ出してだ、ね、とにかく、俺一人に委せてくれ、俺が一人で社長を訪ねて、どうにか諸君の要求通りの條件を貫徹させてみせるからと、自分から一人で役目を買つて出たことなども、これあ、ことによつたら、俺達が、一杯喰はされたわけになるのかもしれないな。

労働者一。 馬鹿な、輕卒なこと言ふのは慎まなくてはいけないな。俺達が、今日のやうに俺達の境遇や地位や、正常な主張と行爲をあくまで主張せねばならぬこと、それが俺達が人間であることの権利であると云ふよりも、寧ろ義務であることを知るやうになつたのも、一つは廣野君の熱心と努力の影響なんだから、そして彼の誠實と主義の爲めの節操はこの數年來の生活そのものが證明してゐることなんだから、たとへ今日の歸りが遅いからと云つて、直ぐにも、さうした口吻を弄するのはよくないことぢやないかと俺は思ふ。

労働者二。 しかし、ね、俺達のこの氣持は、別に今日この時に限つたことではないんだ。俺達がまだ自分の地位や、現今の社會組織や、資本と労働、資本家と労働者、生産者と消費者の關係が十分にのみこめなかつた時分の廣野の元氣と云ひ、言ふこと、云ひ、それは素晴らしいもの

だつた。それがどうだらう。少し俺達が、それらの理論かのみこめ、さうした理論によつて開かれた眼で、現實そのものを凝視め、直視し、そして、その直視と直観によつて正義と信ずることを、一致團結して實行しようとするまでに進歩した今日になつてみれば、廣野はだんだんに昔の元氣を失つて、妙に沈みこんで、むしろある場合には止め男の役をさへ勤めかねなくなつて来たのはどう云ふものだらう。殊に今度のことなんでも、彼の腰の弱さは、むしろ俺達の結束を弱め、俺達の精氣を挫く所爲だとも見れば見られないこともない位だ。

労働者一。 ふむ。

労働者二。

大體が、今度の會社への要求を持出すことは、廣野君が主動者なんだからね。それが、いよいよ、職工全部の一致結束が成立して、不意に、無警告的に、同盟罷工を斷行してしまつて、いよいよ社との交渉期限のきれる、そして、もし俺達同志の要求が容れられなければ、直接行動で工場をたゞきこはさなくてはならぬその期日が明日に迫つて来たその前夜、急に廣野自身が、妙な穩健論なんぞを唱へ出し、圓滿な解決をつける希望があるから、とにかく俺に委せてくれ、最後の手段はその後でもおそくはないと云ひ出したことなんぞ、實際、三君の云ひやうによつては、俺達を賣る行爲でないとは云はれない。工場にゐてハンマーを握つてゐた手

に萬年筆をもつて、英國労働黨の綱領を書き出すと、まるで無氣力になつてしまつたヘンダーソンやゴムパースの心理は洋の東西を問はないのかも知れないよ。實際、廣野源一君の今日の労働者間の聲望と對社會的の交渉の機會は、實際、追々に「労働者の貴族」に押しすゝめてゐるのだから。労働の貴族と資本家貴族とは、手を出し合ひさへすれば、直ぐに握手ができるんだから、はつはつ、今夜あたりの遅いのも、警察の手が廻つたどころか、資本家貴族の白い肥つた手に、お情けの酌をしてもらつて、いゝ氣で同志を賣つて買つた酒の味のよろしさに舌鼓みを打つてゐるのかもしれないや。

(みや子、銚子を持って出てくる)

みや子。 お待ち遠さま、夜がふけて大さう寒さが身に沁みますこと。(労働者一に) 一つ召し上げな。廣野はどうして、かう遅いんでせうか。何んなら、わたし行く先へ迎ひにいつて來ませうかしら。

労働者一。 なあに、それには及ばないさ。そのうちには歸つて見えるだらう。それに、廣野さんは、今夜は工場にはゐないのだから。

みや子。 ほんとに長い間お待たせして、申しわけがございません。(労働者二三に) お酒でも上つ

てゐて下さいまし。(酌をせんとす)

労働者二。 何あに、私共は勝手にやりますからよろしい。はつはつ、こんな可愛い女房に氣をもちます廣野も罪な奴ぢやな。

労働者三。

さうした罪な女房がゐるからこそ、今日この頃彼奴の軟化なのかも知れぬぞ。ふむ、考へてみれば、眞個の原因はかへつて、その邊にあるかもしれぬな。

労働者一。

ふむ。(三人一時にみや子をみつめる。みや子顔を伏せ、ぼうつと赤くなる)

みや子。

(先刻からストーブの前で居睡りしてゐた盲人と女の兒をゆりおこす) 法界屋さん、法界屋さん、もう大さう遅いやうですよ。

法界屋。

(やうやく眼ざめ) は、はい。あー、たいへんよい氣持でうとうとと眠つてをりました、

おゝおゝ、からだも、若返つたか、春になつたやうにほかほか暖かになりましたわい。さ、(女の兒をひきおこし、起き上る) ゆきませうよ。宿無しといふものは、一つところにもものゝ一時間もゐてはいけないものだからね、はつはつ、氣樂といへば氣樂ぢやが、これからどこへいつたらよいものか、淋しいことぢやな。ねえさん、有り難うございました。おかけさまで、大へん暖かになつて結構なことでした。では、さやうなら、(戸を明けようとする、と、同時に、戸外へ)

先刻の男一、二、に追つ立てられるやうにして、眞太郎、姿をあらはす)

眞太郎。 君達は、さうして、どこまでもついてくるつもりなのか。あれ程わけを言つてきかせても、未だ分らないとは、不思議な人達だね。

男一。 さうだ、分らないから分らないと云ふのだ。何故、己達につきあつたのだ。

男二。 しかもだ、つき當つておき乍ら、何故あれ程謝まれと云つても謝まらないのだ。

眞太郎。 しかし、つき當つたのは君達が酔つぱらつてゐて、あの狭い道を横行してゐたからぢやないか。それに、謝まるわけもなからうぢやないか。

(法界屋と女の兒戸外に出づ)

女の兒。 あら、さつきの小父さん、また、來たの。

男一。 おゝ、お前達は未だゐたのか。(女の兒、さいならと言つて去る。眞太郎に)とにかくこんな寒いところで物を言つてゐても初まらないから、この中へ這入つて、まあ仲直り半ばに一杯つきあはうぢやないか。

眞太郎。 ふむ、無駄なことだ。私はそんなことをする必要がない。

男二。 それぢや、君は、己達の顔を丸つぶしにつぶす氣なのかい。さうなれば己達も男だ、どう

せかうなれば、行くところまでゆかなくてはならないから。

眞太郎。 君たちは實に妙な人たちだね。つき當りもしないのに、つき當つたと言ひ立て、そのあと方もない一つの事實を根據にしてだね、それを一つの原因にして、妙な風に論理を進めてからに、そして、その結論が、このコーヒー店で、一杯のむことにしてしまふとは、實に、妙な精力と努力ぢやと、感心してゐるんだよ。

男一。 何を言ひ出すのだ、とかく己達を君は侮辱したのだ。その侮辱をどうしてくれるつもりか、と言つてゐるんだ。己達は今、ここで君を袋だまきにさへすることができんだから、それを一杯のんで清く分れてやらうとさばけて出てゐるんだ。實際、君こそ、分らない、妙な奴だね。

眞太郎。 (少しむつとして) 清く分れるも、合ふも、何もないぢやないか。實に妙なことを言ひ出すんだね、ふむ。それが、不良青年共の「因縁をつける」とか、何とか云ふことなのかもしれないが、だめだよ私に、そんな手を使つても、だめなことなんだ、私が誰れだか知らないのは少し氣の毒だね。はつはつ、もつと世間の馬鹿共になら効能があるかも知れないが。はつはつ。

男一。 何んだ。こいつめ、こつちからおだやかに、やさしく出てゐれば、いゝ氣になりやがつて、

己達を不良青年だとは何んだ。おい、いやに生意氣な哲學者ぶつた男よ、どうするのだ、一杯のんで清く分れるか、でなければ、この雪塗れの地面へ手をついて、どうもすまなかつたと謝まるか、どうするつもりなんだ。

眞太郎。 己は君達とは全く無關係な人間だからね。曩に、この一すぢ道をゆきあつた丈けの路傍の人ぢやないかね。私は今、家に、急な用事をひかへてゐるのだ。急がぬ道ならば、かなへてあけてもいゝのだが、今日は一刻を急ぐ用事をひかへてゐるし、それに持ち合せもないのだ。君達が一杯のまうと云ふいぢらしい慾望は、私のやうなものとつつかまへて、ちと、お氣の毒な氣もするが、まあ、勘辨してくれたまへ、ぢや、失敬。(去らんとす)

男二。 (前に立ちふさがる) 待て。

みや子。 何んだ戸外が騒々しいのね。(戸を明ける、そして、雪明りにすかしみる) 誰れ。何をしてゐらつしやるの。

眞太郎。 どいて下さい。

男二。 どうかぬのだ。(眞太郎の胸をとる)

眞太郎。 君は私をどうするつもりだ。

男一。(後から、眞太郎をなぐる)この野郎! この寒い冬の夜に、見ず知らずのお前なんぞに、大の男が二人も手をつくし品を代へてつきまとふのを、有りがたいとも考へないで、只で済ませうとは、太い奴だ。

眞太郎。

(後頭をかゝへ、右手に、包みらしきものを持ち)何をする!

男二。

何を。(眞太郎の頬をなぐりとばす)

眞太郎。

なぐつたな。(やうやくふみ止り)ふむ、お前達は、お前達は、可愛さうな、馬鹿な奴等だな。

みや子。

あら、さつきのお客ぢやないの。(労働者達に)こちら、さつきよつばらつて、悪るさを

した不良少年達が、二人で誰れかをなぐりつけてるますのよ!

労働者一、二、三。何に。

(三人戸外にとびでる、男一、二、をなぐりつける、しばらく格闘、男一、二、逃げ去る、労働者一、雪道にたふれた眞太郎を引き起す。)

労働者一、二。

どこも、お負傷はありませんでしたか。

眞太郎。

は、いや、馬鹿な物好きがるたものです、實に妙な……

みや子。

こちらへお這入りなさいませ、ほんとに、何をするかわかりませんわ。

眞太郎。

(みや子、ストーブの火を旺にす、労働者もとの席に復す青年ストーブの前の椅子による。)

どうも、ありがたう。

労働者二。

はつはつ、弱い者いじめの好きな馬鹿な墮落書生共だ。ほんとに、どこも、負傷はな

かつたかね。

眞太郎。

(後頭を押へうつむいたまゝ)え、ありがたう、なに、どこも大したこともありません。

あんな奴等に負けはしないのですが、家に急な用を控へてるもんですから。それに、眞面目に相手にするのばかばかしいもんですから。はつは、妙な奴等だなど、考へてるうちにうしろから擲りやがつて。

労働者二。

まあ、どうもなくて、結構でしたな。——ところで、今から、社長の邸へまで、廣

野君を迎へがてから、様子を見にゆかうぢやないか。そして、もし、要求が容れられ、ばそれでもよいが、もし、萬一のことがあれば、今夜のうちに、同志の者全部に通達して、明朝未明のうちに、いよいよ、乾坤一擲、工場といふ工場をたゞきこはすんだ。

労働者一。

ま、どつちにしろ、廣野の消息を一刻も早く知る必要がある。ぢや、迎へにゆくこと



にするか。——きつと道で遇ふぢやらうか。

労働者二。 道で會へばそれほどいゝことはなし、引つばられてもいつてゐるなら取り戻せばよし、または、莊田の邸で大業にとろけてゐるなら、ふみこんで引きずり出してくるのもよい……

労働者一。 (奥の方へ入ったみや子に) みや子さん。廣野君を迎ひにいつて來ますから。なあに、案じることはないや。はつはつ、(青年に) 近頃は物騒ですから。ゆつくり休んでからのゆきなさい。(外へ出でんとす) ほつ、雪が降つてゐることわいな。(三人去る)

(眞太郎黙然としてうつむいたまゝ、火焰をみつめる。しばらく静か。奥からみや子コーヒをもつて出て來る)

みや子。 (青年に) ほんとに大へんでしたわね。でも、おけが、なくてほんとに結構でしたことね。

近頃は、道一つあるくのも油断がありません。大へんな世の中になつて來ました。

眞太郎。 なあに、東京の街位、——人間の住んでゐるところ位、油断して歩いたつて何んでもないわけなんです、たかゞ、頭の一つや二つなぐられる位のこととは、何んでもないことなんですよ。頭の一つや二つなぐられることが厭さに、盜賊のやうに神経を配つて、油断なく歩いたり廣い廣い地の上を自分から狭めたりすることよりはね……

みや子。 ほゞ、(眞太郎をしげしげと見下す) それもその通りでわね。(ふと何か胸の奥に觸れられたやうに涙含む) わたしの兄も、よくそんなことを申しましたわ。

眞太郎。 なに。(と顔をあげて、みや子をちいつと見入つてゐたが) おゝ、(と驚きと喜びでいつぱいの聲で立ち上る) お前は、お前は、——

みや子。 (はつとして、突立つたまゝでしばらくゐるが、ふいに、涙聲になり飛びつく) 兄さん!

眞太郎。 ——みや子ぢやないか! 不思議だ、不思議だ、今夜は何と不思議な夜だ。何と不思議なおひきあはせなんだ! (膝にもたれ、顔を伏せてすゝりなくみや子の肩や、髪をなでながら) みや子ほんとに、わたしは、お前の兄だ。何年振りになるかな、わたしが二十二で、お前が十七だつたから、もう四年前になるねえ、泣いてはいけぬ、泣いてはいけぬ。はゞ、泣けるのか、泣けるなら泣くもいゝが、あゝ、不思議なものだね、え、みやちゃん。それで、お前は、やつぱり廣野といつしよにゐるのだらうね、何に、うん、さうか、ゐるのか、ゐるのか。さうなくてはならぬわけだ。わたしも、綾ちゃんといつしよに今も住まつてゐる。

みや子。 兄さん、わたし、わたし、お會ひしたかつたのよ。お會ひしたかつたのよ。(顔を上げる) やつぱり兄さんに違ひないわね。

眞太郎。 は、子供のやうなことを言つてゐる。わたしはお前の兄に違ひはないのだ。(あたりを見廻はし) こゝはお前の家なのかい。

みや子。(うなづく) え。

眞太郎。 未だ嬰兒は出きないらしいな、そして、今は、廣野はどうしてゐるのだ。むかしのやうな元氣で、達者でやつてゐるだらうとは考へるが。

みや子。 廣野はむかしのやうに元氣で、労働をやつてゐますの、莊田機械製作所の職工長をやつてゐますのよ、でもね、

眞太郎。 ふむ。

みや子。 むかし乍らの一徹と負けぬ氣と棟梁氣質が抜けないために、近頃は、自分から労働運動に熱心になつて、そのためにする分苦勞をしてゐるやうですの。この四五日前からも同盟罷工だとかで、夜もろくろくねずに、恐ろしい日を送つてゐますの。それよりか、兄さん、あなたは、あれから、どうして暮していらつしやいました、それをきかして下さいな。

眞太郎。 ほ、う、あの莊田の機械製作所の職工長をやつてゐるのか。さうとは知らなかつたな。——自分の事を言ふよりも、お前のことから先にきゝたい位だが、あゝ四年前の春のことだつ

たね。(みや子うなづく) わたしは廣野の妹の綾さんに、お前はお前で廣野と、互に互が愛しあつてゐることを、あのふるさと、の長い長い、丘の小高い海邊で、あかしあつてから、わたしとお前は揃つて、父さんにお願ひをしたのだつたね。は、そして、父さんから、まるで、世界で、これより恐ろしい罪惡がないかのやうな權幕で叱られたつけな。

みや子。 わたしは、あの時、恐ろしいやら、悲しいやら、口惜しいやらで、ほんとは生涯ではじめての激しい感情を知つたのでした。

眞太郎。 それから、よくお前と廣野、わたしと綾さんと、四人が海邊の砂上で集まつてどうしようかとよい智慧を借り合つたものだ。お互に未だ世の中の實際を知らぬ、眞個の純な美しい子供そのまゝな感情に支配されてゐた。あの感情は決して悪いものではないし、この人生で一番尊い純の純なるものなのだが、それを知つて支配されてゐると、知らずに無我夢中で支配されてゐるのは、違ふからね、あゝ、その純の純なる感情の尊さを知るために、わたし達は大きな犠牲を拂はねばならなかつたわけだね。

みや子。 兄さん、わたしは忘れることができません。初めてあの、わたし達の生涯の恐ろしい決心と相談を、しかも、無邪氣に清明に、まるで雲雀が春の空にさへづつてゐるやうな氣持で定

めた日のことを。海邊の砂の上にねころがつて、兄さんはわたしの肩をたいて仰有つたのね、みや子、うつかりと軽い氣持で可能るうちに實行しなくてはならないけれど、しかし、決してうつかりしたことではないのだよ。一生とりかへしのつかない一大事なのだからね、と、そして、わたしと廣野とが先きに、そのわたし達二人の行方を探すふりをして、兄さん、あなたと綾さんが、四人一時に家を出て、ふるさとを出て、果しのないあてのない旅に出ることにしたのでしたわね。

眞太郎。 さうだ、己達が町の活動を見に出た歸り、己はお前と廣野を寂しい停車場へ見送つて来た、が、その次の日、わたし達が豫定したやうに、わたしと綾さんは、家を出ることができなかつたのだ。あゝ、あの時の父の平常に似ない惰心さと氣落ちとを見ては、同じ思ひを、父の生きてゐるうちに、再び體驗させようと云ふ氣にはなれなかつたのだ。實際、あれ程嚴酷で冷酷で一徹で、鬼のやうに見えた父が、日頃の頑健さにも似ないでひそかにお前のことをどれほど心配したかは、お前達が家出をしたことが分つたその朝、急に十ばかりも一時に年を老つて、頬が瘠せほうけだしたことによつても明かだつた。わたしに可能きたことは、その父に警察への搜索願をさせなかつたこと、お前達の眞個の落着き先きを知ること、そして、やがて、自分達

も家出を決行しようといふことだつたが、——みや子、現實の進みゆくすがたは常に、私達の小さな豫想と概念を破壊しなくては止まない。内々安心して居所をつきとめるつもりでゐたのにお前達二人の居所はこのわたしにも分らない、父の心勞と衰弱は一時に氾濫して、あのゆるすことを知らなかつた父の心が、眞太郎、みや子と廣野が歸つて來たらいつしよにしてやる、とまで言はねばならぬほどとなつた。そして、最後の一週間目には、私自身から警察へ搜索願を出したといふわけだつた。——しかし、お前達の住所は知れやしなかつた。

みや子。 わたしと廣野は、兄さんのお指圖通りにあの夜、あの東京行きの汽車に乗り、兄さんのお指圖通り名古屋から中仙道の汽車にのりかへ、飯田橋の方から東京へつきましたの。案じてゐた追手の人も見えず、東京はちやうど櫻の花見の眞つ盛り、氣も心も浮き立つ春四月のことでしたわ。私達は、兄さんが仰有つたとほりの宿に一旦ゐましたけれど、直ぐにあとお見えになる筈のあなたは來て下さらず、そのうちに廣野が申しました、どつちにしろ、働がなくてはならない、この力に充溢してゐる心身を無駄に使はずに暮してゐるのは勿體なさ過ぎると。そして、廣野は自分一人で勞働の口を求めて來ました、私達二人は直ぐに、淺草に近いある下町の二階借りをすることにしました、廣野は申しました、眞さんには眞さんの覺悟があるのだ

らう。家出をしなかつたものか、しても約束通り来なかつたものか、どつちにしても、各人の運命は各人が自分でしつかり把持してゐなくてはならないのだ。綾子のごときは眞さんに委せた。一生だから、眞さんといつしよにふみしめてゆくことだらう、だから、みやさん、さう廣野は眞率に申しましたの。あなたも不服だらうが、この廣野一人を力にもし、また力にもなつてくれ、一切のものから逃れて来てまた捨てられて来た二人の、生きるか死ぬるか、興るか滅びるかの大切の瀬戸際だから、これからは眞實に新しい生涯を初める氣で、運命を切りひらき、生活を闘つてゆかうと。わたしは兄さん、うれしかつたのよ。さう言はれて、たゞ、泣けてしかたがありませんでした。そして涙のうちからも、新しい決心をせずにはゐられませんでした。もともと、たとへ幼なじみとは云へ、同じ町内に育つた仲とは云へ自家の世話になつてゐる男と出奔したいたづら者のわたし、もはや、妾は和歌山一の資産家の娘ではなくて、一人の貧しい労働者の妻なんだと、わたしにはもはや親もなければ、兄妹もなければ世間もなく、たゞ、あるものは、夫の廣野ばかりだと、さう決心してみますと、別な、新しい、生氣に充ちた、辛苦だけれど、希望に充ちた生涯がわたしの前途に連綿として展かれて見えました。あゝ、それから四年の間、兄さん、わたしはかなりに苦しい目にもあつて来ました。兄さんや綾さんのこ

とも忘れたことはないのです、しかし、生じひにさうしたことを想ひ出しては自分の張りつめてゐなくてはならぬ生活に取り返しのでつかないスキが出来ること、思つて、さうした感情の芽を殺してはまゐりましたが、今では、どうにか、わたしが、この店を經營し、廣野は製作所の職工長を勤めるかたはら、あの氣象で労働運動の一方の主動者になつてゐますのよ。兄さん、あなたはどうして、今夜、ここへお出になるやうになつたのでございますの。あゝ、今、かうして兄さんとお會ひしてゐますと、無理やりに忘却の底へ押しこめてゐた、ふるさとのことが、無限の痛みとたとへやうのない悔恨とをもつて甦つてまゐります、父さんはどうなさいましたか、私共の不幸の根本の原因である、あの後妻の繼母は。それに、綾さんは、そして、兄さん、あなた御自身は？——いつたい、和歌山には、むかしながらの私共の家が、あのお城のやうな丘家の邸が未だ、あるのでございますか。

眞太郎。 邸はもう無い。人手に渡つてしまつたが、その性質のよくない商人は、土臺石ぐるみ、船で大阪へ運んでいつてしまつた。

みや子。 では、父さんは？

眞太郎。 父は、お前達が出奔した年のその秋、何といふこともなしに死んでしまつた。

みや子。では、私達が、父の命を縮めたわけですね。

眞太郎。さう云へばさうに違ひはない。しかし、命を縮めさせるやうにしたのは父自身だったのだから、誰に罪があるとも云はない。罪があれば、皆んなに罪があるわけだ。

みや子。兄さん、あなたはいつ東京へいらつしやいました。

眞太郎。父が死んでから、その年の暮に。父が死んでみると、知られてゐなかつた負債が、あちらからもちちからちから出てきた。折りも折り、あの南海通ひの太平洋丸が熊野灘で暴風にあつて破船してしまふ。後妻の繼母は、番頭とグルになつて目ほしい現金を隠しはじめ。——實際、小説の上でか話の上でのみ知つてゐた舊い大家の大黒柱がゆるぎ出して、悲惨な没落をするのを、自分自身のこととして身を切られるやうに體驗しなければならなかつたものだ。——みや子、和歌山一の舊家といはれた、丘家を人手に渡したものはこの兄だ。しかも、私は、すなほにすまぬことをしたと思ふことも言ふこともできぬ。お前は、この私の淋しい氣持を知つてくれるだらうね。

みや子。わたしには何とも申し上げる力も資格もございません。——それよりも、もつとその後

の兄さん御自身の話をきかして下さいな。綾さんのことも。綾さんのことを兄さんはさつきか

ら少しもお話しにはなりませんでした。

眞太郎。綾子のことを話することは、とりも直さず私自身のことを話することにもなるといふものだ。恐らく私自身のことを話すよりもつと痛切にな。(太息)あゝ、みや子、この人生で眞實に生きるといふことは、實に、實に、すばらしいことなんだね。太陽が赫々と中天に輝いてゐることよりも、もつと偉大で悲壯で辛辣で嚴肅で、苦しくつて、そして絶大の歡喜なんだね。戀、戀、みや子、お前がお前の戀に忠實であつたやうに、私も私の戀には忠實であつたつもりだ。戀を眞に生きるとは何といふ……

みや子。綾さんはどうしていらつしやいます。私、お會ひしたい氣がします。

眞太郎。お前達の行方は知れず、綾さん一人が残されてしまつてみれば、やはり世話はこのつちでしなくてはならぬと父も無理にも氣が折れて、綾さんは家の手傳ひにはいつてゐたのだ。それは、家出をできなくなつた私共にとつては何といふ喜びだつたらう。ほんとに戀は死せる者を甦らす地湧の力だ。朝早く起きて、かつてのお前がさうであつたやうに、流し元で働いてゐる美しい綾さんをみる喜び。それまでは、お前も知つてゐるやうに、朝晩く起きて二度しか食べなかつた飯も三度攝るやうになり、氣も體も軽々と元氣になり、一寸用に戸外へ出るにして

も、上り口まで遠慮深さうに見送りに出て、「いつてらつしやいまし」と聲をかけてくれ、時には、誰れもゐない時には、そつと、門口に立つて、家のあの枝垂れ柳のある街角へ見えなくなるまで、見送つてくれることが、どんなに私を人生は生き甲斐あるものと感じさせたらう。實際、お前がゐなくなつた後の丘家の家庭にとつては、綾子は唯一の美しい花となつた。このことは、父も直きに認めずにはゐられなかつたと見え、繼母が綾子を家に置くことに反対したときも、父はきかなかつた。しかし、綾子は夕飯にみんな食卓に集ると眼に涙をためて、私を見上げて、無言で堪へがたい悲しみをもたらしたものだ。そして、行方の知れなくなつたお前達のことを思つて涙含ますにゐられなかつた。父が急に衰へ出し、死ぬ前には、すでに、私に、綾さんを丘家の妻にすることをゆるす意向さへありありと見え、それにつけても、お前達のごことが想はれてならぬといふ風だつた。——が、その父も死んだのだ。そして、その家もつぶれたのだ。私と綾子とは、はじめ、東京へお前達の後を追つて、お前達とは一年おくれて來たわけだつたのだ。

みや子。(ほつと太息をもらす)そして、今は、どうしていらつしやいますの。

眞太郎。東京へ來ても最初は、とりつく島もなかつた。そのとりつく島のない己れを、とにかく、

一人格として認め、一人格として交はつてくれたのが、清瀬豊次郎といふ有名な、豪い思想家であり、實行家である人だつたのだ。——お前は知らぬかな、その人の奥さんは有名な女優の飯森音羽子といふのだが。——

みや子。(ほつと太息をもらし、涙含む)

眞太郎。それにしても、どうして、四年の間、同じ東京にゐながら會へなかつたのだらう。そして、しかもこんな夜に、かうして、突然お前に出會ふとは!

みや子。兄さん、何といふ、不思議な不思議なめぐり合せでせう。

眞太郎。みや子、綾子は今、その清瀬といふ人の奥さんの音羽子さんが、少し病氣なので、その方へいつてゐる。

みや子。では、今は、——綾さんが待つていらつしやるのでしょ。

眞太郎。まあ、落着くが、綾子は、その最愛の夫が夜、なかなか歸つて來ないといふ程度の不幸にはもう十分慣れ切つてもゐるし、鍛練もされてゐるのだ。そのためにグラツクには、あまりに私共は痛烈な練達と體驗をなめさせられて來たし、また、あまりに私共はこの人生の實在を信じ、私共の愛を信じてゐるのだから。——東京へ出てから、清瀬にひろはれてから、

私と綾さんは二人で勉強をはじめた。金は少しは持つてゐたが、みや子、苦しかった、實に苦しかった。自分より豪い奴ばかりがあるやうに見える大都會のたゞ中で、どうにか、その、むかし豪い奴と見立てた奴を、見下し得る丈の實力を養ふことは、みや子、苦しい仕事だつたよ、この己れにはな。さうした苦しい生活に堪へ得られたのも綾子の力だ、綾子の私を思つてくれる一念の力のおかげだつた。

みや子。 兄さん、私だつて同じことですわ。こうして、こんな休み處みたやうな稼業をしていろんな客にどうにか應待ができるまでには、貧乏の苦しさや慣れぬ世間の苦しさや、その苦しい中を廣野は一人で脊負つて、私に涙一滴こぼさずまいと努めてくれました。

眞太郎。 死んだ親父は、死ぬ間際になつて、己れは綾子と、お前は廣野に、それぞれ結びつくことを、仕方なしに承引はしたが、それでも、やはり、どうしても、われわれの方がプラスで先方の兄と妹の方がマイナスで、われわれの方が與へる方で向うの方が受ける方で、われわれの方が恩恵者で先方が被恩恵者のやうに考へてゐたものだが、その考への根據である、和歌山一の舊家であることや、資産のあることなどは、親父の死と同時に水泡のやうに消えてしまつて、さて各々が自分の道を切りひらくことになれば、結局、親父の考へは正反對で、私共兄

妹こそ廣野兄妹にその運命を支持されてゐるやうなものなんだね。

みや子。 ほんとに、さうですわ。わたしは、廣野がゐなかつたら、どうなつてゐたでせう。

眞太郎。 最も、廣野兄妹が、すぐ生れ故郷の、同じ町内の向側に、親爺の先妻の遠縁の孤兒として、あの二人がゐなかつたら、私共の運命ももつと別の、ことによつたらもつと幸福なものだつたかもしれぬ。しかし、廣野兄妹は幼なじみの頃から存在してゐたのであり、お互に戀しあつたのであり、少くとも、眞に生きるには、その戀を戀として實行するより外に道はないのであつたのだから。そして、結局、かうして過ぎ去つて考へてみれば、丘家のあととりと箱入娘であるよりも、今の自分達である方が、眞個に、人生がどんなものであるか幸福がどんなものであるかを知ることができ、結局、眞の幸福だとも言へるのだから。

みや子。 兄さん、あなたは有り難いことを仰有つて下さいませ。あゝ、それにしても、神様神様、ようこそ、兄に會はして下さいませ、ようこそ兄に會はして下さいませ。(泣く) 兄さん、もう一生わたし達は死ぬ迄、お別れしなくとも、いゝのですね。もう、もう、わたしは兄さんに別れはしないのだから。

眞太郎。 ふむ、みや子、ようこそ達者でゐてくれたね。

(雪がしきりなく降つてゐる。眞太郎、みや子、相擁してゐる、みや子の忍び泣き。ストーブの火焔が消えかゝつては燃え上る。しばらくして、雪の中を、廣野源一、先刻の労働者、一、二、三、に囲まれて戸外へあらはれる。)

労働者一。 そんなことでは、彼奴等同志の熱い心は、決して承知はしないにきまつてゐるのだ。

廣野。 (腕組みし、沈鬱な顔) ふむ、(立止る)

労働者二。

もし、あなたが、さう云ふ風に一種の軟化してしまつたのならば、われわれはかう云ふことは云へたわけではないけれど、貴方を待つまでもなしに、われわれ自身でもつて、今夜のうちに準備をととのへ、いよいよ直接的な行動を断行しなくてはならぬのだから。——いつたい今日は貴方が己れにまかせろ、と言つて出ながら、その責任のある言葉に似あはぬ、いつもの貴方に似合はぬ、妙な解決をつけてこられたものだね。

廣野。 (答へずぼんやりと) ほ、もう家の前へ来てしまつた。(戸をあける) みやさん、今、もどつた。

みや子。 (首をあげ、立つ) あなた！ ようこそお歸り下さいました。あの、兄さんが兄の眞さんが來てゐますのよ。(廣野にすがりつく)

廣野。 (氣づかず) ふむ、あゝ、寒かつた。(ストーブに近より眞太郎をみつめる)

みや子。 兄の眞さんが……あなた。

廣野。 (驚き前に進み出る) おゝー 眞さん、眞さんぢやないか、あゝ、眞さんぢやつた。(しかと手を握り合ふ) わたしはもう、とても生きては會へぬと思つてゐるに。

眞太郎。 源さん、久しいことだ。うれしい、その顔を見てうれしい！

廣野。 (どつかと椅子にすわる) 會ひたかつた！

(森然として寒い静けさ。みや子は涙ぐみ二人をみまもる。廣野は腕をくみ、瞑目、深き思案に沈みゆく)

眞太郎。 みや子が世話になつてありがたう。わたしも、綾さんの世話になつてどうにか生きてきてゐる、あゝ、今夜は何といふ……

廣野。 (沈痛に) 綾子は達者でをりますか。

みや子。 綾子さんは今御病氣ですつて、でもね、大分よろしいんださうですつて。

眞太郎。 綾さんのことは心配しなくともいゝ。

廣野。 (眞太郎を致命的にみつめ) 眞さん。

眞太郎。 何んですか。



廣野。 幾年ぶりで、今會ひながら、碌に挨拶もせず、こんなことを言ふのを悪く思はないでくれたまへ、——綾子と、それからみや子のことを、どうか、一つしつかり身に引受けてやると、一言きかして下さらぬか。

眞太郎。 それは又、何んのわけがあつてのことですか。

廣野。 わけか。わけは、(と門口に佇む三人労働者を見て) 今夜にも、俺の命をかけてやらねばならぬ仕事が出てくるのだ。

眞太郎。 みや子。(沈黙)

廣野。 あ、眞さん、あなたに今、會うたことはい、ことか悪いことか、私には分らない。しかし、どうにか逃れることができるのか知らぬと思つてゐた恐ろしい淵へ、私はやつぱり躍り込まなくてはならぬのだといふことだけは確かになつた。實は眞さん、私は今、わたしの勤めてゐる莊田機械製作所全労働者の同盟罷工を企てゝゐるのだ。しかも、相手の資本家はわたし共の要求を容れないで、強硬に出て、明日限り全部の職工を蹴首すると迄言つてゐるのだ。結局、さうなればわたし共は直接行動をやるより仕方がなくなつてゐる。そして、更には、全國的な大同盟罷工にまで仕上げねばならなくなつてゐる。さて、かうなると、何故か、私は恐ろしく

て恐ろしくて、ならなくなつた。平常からいざといふ時に對する覺悟は十分出來てゐる筈の私は未練にも、此の世が名残惜しくなつたのだらうか。いやいや單に自分一個の命や運命や生活のゆく手が不安で案じられるばかりでなく、この大罷工に参加する筈の全國の労働者の一人一人の生活や運命が、眼底にありありと映じて來た。私は、そこで、寧ろ無意識に申し出でずにもられなかつた。私自身が主動者であり、私自身が指揮すべき經歷でもあり地位でもあり乍ら、今しばらく満を持してふみ止まつてくれ、私が、社長の莊田にもう一度會つて、私達の要求條件を入れさせて見せるから、と。そして、今夜の八時を期限に會つたわけだ。私は、最後の望み、はかない望みを抱いて、社長に、その辛辣と苛酷と、悪いことには生じつか思想的背景のあるために、我國實業界の巨頭といはれる莊田の邸の豪華な、壯麗な西洋室で會うたわけだ。此方からの要求通り廣い室内には莊田一人しかゐないらしく見えた、で、私はもう一度彼にむしろ哀願した位だつた。もし、さきに、蹴首した九十名の職工を全部復職させ、またわれわれの要求であるところの八時間労働と、工場管理の責任と義務とを委任させてくれるならば、われわれは立處に、この罷工を今夜のうちにも解決するだらうし、その方が、結局資本家自身のためにも利益であると説いたのだが、——だめだつた。莊田は一言のもとに、ならぬ、とこ

たへた。九十名の職工を復職することがならぬのみでなく、工場の自治などは大それた考へだとぬかしをつた！ すでに、さきに君達が要求の通り、九時間労働を實現し、賃金も増加し、養老、負傷等の十分の積立金制度迄こしらへてゐる以上、この上何をする必要があるのかと云ひをつた！ もし、君達の方であくまで罷工をつづけるなら、明日にでも君達全部を解雇すると言ひをつた！ あゝ、その時、私は言ふべき、言はねばならぬ一つの言葉を知らぬのではなかつたのだ。労働者、生産者としての當然の道、生きてゆく當然の道を開拓しない資本家であるならば、我々はさうした資本家の下にある機械はもはや社會の生産に寄與するものではなくて、實にゆるしがたい害惡の存在だから、破壊してしまふ！ しかも、全工場の全機械を破壊しても、莊田、お前は明日食ふ米の心配はしなくともいふんだ！ お前が目腐れ金で誠首した、そして、場合によつては全部を誠首すると云つてるその職工は、その日から、食ふ米の心配をしなくてはならぬのだ。——が、私は言へなかつた。何故かと言ふに、その西洋室のカーテンの彼方で、微かに金屬性のきしる音響がしたから。その薄暗闇に、キラキラと白いは佩劍が、白魚の腹のやうに凄く閃めいて見えた。さては、手が廻つてゐるな。その瞬間、ヒヤリと胸にこたへた一種の痛み、その痛みは、とりもなほさず、みや、お前のことを心配する女々しい一念

だつたのだ。また、別れてから數年來未だに會へずにある眞さんや妹の綾に、會ひたいといふ日頃からの願望だつたのだ。私は、無念にも、黙つて、莊田の邸を引き下つて來たが、雪の降る中を、わざわざ迎へに來てくれた同志に對しても、みなもの者に對しても、申しわけがない、顔むけがないと云ふ想ひで、胸いつばいだつたのだが、あゝ、やつぱり、私の誠意は天に通じたのだ。天は、私の男をすたらせる程無慈悲ぢやなかつたのだ。ありがたい、ありがたい、ありがたい……(顔をふし、聲を立てずに男泣きに泣く)

眞太郎。 源さん、よく分つた。私も男だ。實は、源さん、私は有名な清瀬豊次郎といつしよに働いてゐるのだ。いざとなれば、私は清瀬と共に、出来る丈けの力は惜しむまいから、あとの心配をせずに、どこまでも君の男を立てたらどうだ。

廣野。 ほう、清瀬と一緒にゐたのか——それでは、眞さん、みや子のことを、それから妹のことを、厄介だらうが、頼みます。(みや子に) お前も達者でゐるがいゝ。(立上る)

みや子。 貴方、今から、どこへ、何しに、いらつしやいますの。

廣野。 今からか、(寂しき微笑) 今から俺は、………ゆくのだ。人間の生血をすゝる怪物を………ゆくのだ。あとのことは、眞さんに相談をしてくれ。生きて還れる

ことであつたなら、また、會へるといふものだ。

みや子。 貴方、わたしを置いていらつしやつちやいけません、わたしも、つれてつて、つれてつて下さい。(すがりつき) どこへでも、どんな恐ろしいところでもわたしのきますわ。

廣野。 お前は来る必要はない。それで永久の別れといふわけでもない。永久の別れの覺悟を秘めて、どんな艱難にも打ち克つて生きてゐてくれ。

みや子。 だつて、わたし。——貴方はいらしつてはいけません。いつまでも、こゝに、わたしと一緒に、わたしのところにて下さい、源一さん。

眞太郎。 みや子、あとには兄さんがゐる。源さんの志を邪魔してはいけない。淋しくとも我慢しなくてはならぬのだ。

廣野。 では、眞さん、お達者で。綾子のことも頼みます。(大またに歩み、門口近い同志に近づく) さつきは失禮した。では。いよいよ、

労働者一。(廣野の手をしっかりと握る) 廣野君、よく、決心してくれました。

廣野。 今夜のうちに、全工場の機械、……………のだ。責任は己れが、己れ一人が負ふ。さ、長い間、諸君に氣をもませて、すまなかつた。廣野源一は元來、女々しい男だ。

たゞ、諸君の重い信任が、女々しい男をも強くする。後に心を残さなくともいふやうに、天は、己れを捨てなかつたものと見える。今こそ、己れは、諸君の熱望を全身に充溢さして、自分一人のこととして、……………つける。長い間すまなかつた。

(労働者一、二、三、握手をかはし、廣野を中央に、戸外へ出る、雪が降り止まず。眞太郎、みや子、門口から見送る)

眞太郎。 さよなら、後のことは心配なく。君の背後には天下がついてゐる!

廣野。 さよなら、お達者で。

みや子。 貴方、お大切に、お大切に、ね。

廣野。 うむ。

(四人雪の中に見えなくなる。眞太郎びつしやり戸をしめる。室内静か、眞太郎ぼんやり立つてゐる。みや子をストーアの傍へ抱くやうにして、すわらせる)

みや子。 兄いさん。

眞太郎。 何んだ。

みや子。 今夜はどうしたといふのでせう。

眞太郎。今夜は、人の一生にとつて數へる程しかない、いや、むしろ二度とない。何とも云はれない微妙な恐ろしい運命のその前夜なんだよ。大へん寒くなつた。火を熾してくれないか。

みや子。はい。(ほっとして) 兄さん、廣野はいつてしまつたのね。

眞太郎。ふむ、廣野は男だから。ゆかなくてはならぬ時には、ゆくよりほかに道はないのだ。淋しいことだが、仕方がないことだ。

みや子。(沈黙)

眞太郎。廣野が無事で歸つてくるか、あるひは、何年かをあの暗い牢屋の中でくらすことになるか、あるひは、萬が一、別な新しい社會が、廣野等の手によつて切りひらかれ勝利の月桂冠が彼の頭上に輝やくか、それは、明日になれば分ることだが、どつちにしても、みや子、お前は淋しくとも、兄さんといつしよに、廣野の歸りを待つてゐなくてはならぬ。久しぶりで、綾子とお前と三人で、むかしのやうにのん氣でなくとも、楽しく、淋しく、つつましく、廣野の歸る日を待つことにしよう。

みや子。えゝ。(ふつと思ひつき) 兄さん、綾さんは、兄さんのお歸りを待つていらつしやるでせうよ。

眞太郎。なあに、綾子は、お前よりか苦勞をしてきたよ。夜の歸りのおそい位の程の度不幸には慣れてゐるから、何んとも思つてやしない。が、それにしても、私は一度自分の家へ歸つてくることにする。(みや子、しくしく泣き出す) みや子、泣くの無理もないが、泣くのは止せ。泣くのはよせ! あゝ、雪がしきりもなく、降つてゐることだ。

(戸外では静かな雪降り、しんとした寂しさ)

靜かに幕

## 第四幕

二三二

同じ冬のある日の午後、雪は降つてゐないが、四邊は一帶に白砂の世界である。雪の降り止むだあとの淡い日差しが射し入つてゐる。第一幕の西洋風な音羽子の部屋につゞける、上り口に近き部屋、小さな卓子に對ひあつて、みや子と音羽子が、純白の編物をしながら話してゐる。幕明く。

音羽子。 雪が降り止むだかと思ふと、もう、日が射して来て、みや子さん、もう少しこつちへ寄つてごらんなさい、それはほかほかと暖かですから。

みや子。 え、でも奥さん、こつち側だつて、それ、こんなに日が當つて暖かなんですわ。

音羽子。 さうお、何んだかもう直きに春がやつて来さうぢやありませんか。ほゝ。それから、どうしたの。もつと先きを話して下さいな。

みや子。 えゝ、でも、わたしのむかしの話なんぞ、奥さんつまらないぢやありませんか。

音羽子。 いゝえ、大さう結構ですわ。わたしにはね、貴方方こそ本統に幸福な戀仲といふものなんだらうと思つて、時には羨ましい氣さへするのですわ。

みや子。 (それには答へず)それではお話ししますわ。——そんなことがあつてからといふものは、

わたしは綾子さんと、兄の眞太郎は廣野と、それはそれは仲よしになつたのでございます。わたし共の故郷の海邊は、それは温かで、海ぎしから直ぐに小高い緩やかな地味の豊かな丘がつづいてゐて、この頃の時節にはもう桃の花がいちめんに紅く咲くのです、(采物の實る時節になれば、深緑の生き生きした大きな葉蔭に、大粒な、自然の力にはちきれさうな、緑金や黄金色の蜜柑が、無限なほどにみのるのです。私共四人は、よく、秋の暖かい日を浴びながら、その蜜柑の樹蔭にねそべり乍ら、いつ果てるといふこともない話に魂をとられて、とろとろして濃い、青い青い海原を見てくらししました。實際、あの油のやうに厚みがあつて輝やきのある青い南の國の海の色は、奥様忘られないものでございますわ。ほんとにあの頃は、まるで今から考へると、一度も二度も生れかはり、違つた世界に住むでゐる心持がいたします。それほど、私達は無邪氣で、苦勞知らずで、楽しくて、幸福でした。幸福な時といふものは、どれほど想ひ出さうとしてみただ一瞬のやうな氣のするものです。本統の幸福は無意識で眞實、夢のやうに光りに充ち、輕快で、いつ來たのか、いつ去るのか、それが幸福といふものだつたのだと、意識する時は、もうその幸福は空の彼方へ遠く去つてしまつてゐるものです。私共も矢張りそれでした。廣野兄妹は、幼ない時に双親を失つて、いはゞ私共の父が後見人として養ひ育て、

二三三

るたのでした。それで、廣野なども中學は卒業間際に退いて、市街まちの大きな機械製作所へ私の父の世話で、——尤も並みの職工など、は違つて待遇でしたけれど、勤めてをりました。しかし、そんな自分の相違など、云ふことには父から、厳しく説明される迄は考へようともしませんでした。何故なら、私も兄の眞太郎も廣野兄妹とは、小學校の時分から學校も同じに通ひ、その學校でも、お互に助け合ひ慕ひ合ひ、家へ歸ればいつも、日の暮れる迄街はづれの丘へ出て夢のやうに幸福な毎日をおくつてゐたのですから。私共はお互に、どつちから申し合はずともなく、私は廣野に、綾子さんは兄の眞太郎に、それぞれ夫婦になること、決めてしまつたのも、無理はないと思ひますわ。それとも、無理でせうかしら。

音羽子。 いゝえ、私にしたところでそんな結構なことはないと思ひますわ。

みや子。 ところが、私達の、子供らしい一人ぎめの夢は、私共が年頃になり、少しく實際的に眼がひらけかゝり、私達自身の戀をも、何らか實際的に、形を與へたいと、強い感情に支配されかけると、もうぶちこはされてしまひました。その時分、私は未だ女學校を卒業間際でしたし、綾子さんは一年速い學校をもう出ていらつしやいましたし、廣野はもう立派に一人前の獨立した若者となつてゐました。父は、兄の眞太郎に、同じ町の豪家から新嫁を迎へようと計畫して

ゐました。その方はわたしの學校の一年上の級の方で、それは氣品のある美人でしたの。しかし、兄は父からその話を打明けられた時、きつぱり斷つて、綾子さんを嫁にしてほしいと申したのでございます。そして、わたしを廣野にやつてほしいと申してくれたのでした。わたしは今でも、その日の生れてはじめての深い恐ろしい、そして嬉しい感動を忘れることができせん。しかし、父はゆるしては呉れなかつたのですわ。

音羽子。 綾子さんも、よくその話を、わたしに、して下さいました。お父さんの立場になつて見れば、無理もないことですわね。眞太郎さんは、いつも、父が氣の毒だ、父が氣の毒だ、とわたしに仰有いましたつけ。

みや子。 結局、兄が一番割の悪い、辛苦な役目を引受けたのです。もしも、父一人ならば、わたし達はそんな、今から見れば、かうして生きてゐられるのが不思議な位な無謀はしなかつたのですけれど、家には後妻がゐりましたの。——兄が首謀者になつて、四人が故郷の街を逃げ出し、新しい運命を切り拓くことに相談が決まつた時は、わたし、嬉しく、悲しく、泣きましたわ。四月のその夜、わたしは兄と綾さんに送られ、廣野といつしよに故郷の町を遁れ出ました。今から考へれば、たゞもう熱い感情の湧き立ち上るのにまかせてゐたのでした。でも、奥様、

わたしは廣野がしつかりとわたしの生活の根元を支へてくれてくれたので、苦勞と云ひ艱難といつても、それ程の辛苦ではありませんでした。たゞ四年の間、いつもわたしの心の奥で不安なやるせなさとして残つてゐたものは、直ぐにも後から來る筈の兄と綾子さんに會へない淋しさでございました。

音羽子。　どんなに、淋みしかつたことでせうね、でも、あなたはよく、それに堪へなかつた。

みや子。　廣野の力ですわ。——わたしが廣野に頼りきつて暮してゐる間に、兄は、父の死を送り、丘家の没落の責任者となり、そして、綾さんといつしよに、清瀬さんをたよつて、上京してゐたのでした。でも奥様、この世には確かに神でなければ運命が、でなければ、ある神祕であつて、合理的な見えざる力が、絶對でなくとも、相對的にでも働いてゐるものに相違ございませんはね。それでなくては、折りもあらうに、廣野が生死の岐れ道に迷つてゐるその前夜、幾年待ちあぐね探しあぐねた兄の眞太郎にめぐり合ふといふことはどう感謝し、どう喜んでいゝのか分らなくなりますわ。わたしはうれしかつた！（涙含み）うれしかつた！この寒い冷たい冬、暗い牢屋にひとりつながれる廣野の身の辛さや、わたしの寂しさ位は、このうれしさに比べれば露一滴の大きさもございません。

音羽子。　でも、この寒さで、廣野さんや、同志の労働者達も、困つていらつしやるだらうよね。

みや子。　でも、それ位のこととは、覺悟のことなのですから。たゞ、廣野の身にとつては兄にも會へずわたしのことも行末どうなるか不安なまゝでも、ゆくべきところへゆかねば、男が立たない今の場合に、天から降つて來た様な兄に會へ、綾さんの無事なたよりもきゝ、わたしの身も大丈夫と見きはめた上で思ふことを決行することが出來たのは、どんなに本望だつたらうと思ふのです。そればかりか、わたしはかうして、奥様、あなたのお宅にかくまつていたゞけるのだし、廣野は廣野で、今日は、青年會館で、清瀬先生が、天下に廣野のために大演説會を開いて下さつてゐるのだし、わたしは自分のためにも、兄のためにも、綾さんのためにも、うれしくてならないのでございます。（手をとゞめ）ほんとに、かうして、靜かにあなたと對ひ合つてゐますと、不思議な、神祕な、悠久な想ひがせずにはゐられませんが、——あなたと、清瀬先生がおいでにならなかつたら、私達四人はどうなつてゐたことでせう。

音羽子。　あなたがそんなに言つて下さるのは、世間の人達が私や清瀬のことを比類ない惡黨のやうに言ひたてるのを一度に打ち消してしまふやうで、うれしく思ひますわ。清瀬も、わざわざ京都から出向いてきた甲斐があるといふものです。

みや子。(とつぜん) 清瀬先生は、支那からお歸りになつても、京都へ宿をとりになつたきり、こちらへは、お歸りにならないのだといふのは本統のことでございますか。

音羽子。(寂しく笑ひ) それは、本統のことですの。今日の演説會に出るにしても、清瀬は旅館にゐて、わたしのところへは来てくれないでせう。

みや子。でも、どうしてでございますか。わたしなどには分らない氣がします。先生とあなたとは、有名な戀仲ではなかつたのでございますか。

音羽子。それは世間の噂以上の戀仲だつたの。そして、今も、むかし以上にお互に愛し合つてゐるの。

みや子。それでゐて、どうして、一年近い間、そんなにおさびしく別居同様にしていらつしやいますの。

音羽子。だから、わたしは、あなたや綾さんは幸福だと申すのよ。本統に幸福な、恵まれた、戀仲といふものですわ。——そこへゆくと、わたしと清瀬の戀なんぞは、——殊によつたら、あんまり恵まれ過ぎて、人間以上の戀にまで登りつめたのかもしれないの。

みや子。わたしにはよく分りませんわ。でもね、一年の餘も、あなたがよくおひとり辛抱して

いらつしやつたものと、あなたの餘りの非凡な豪さに打たれずにおられませんか。あなたと、清瀬さんとは、お二人があまりに、えらい方であり過ぎて、結局不幸なのではないでせうか。

音羽子。さあね、どう云ふものでせうかね。初めは、わたしだつて同じやうに、全身を清瀬に捧げ、清瀬の優しげな言葉の一つ一つにも總身をふるはして感動してゐたものなのよ。わたしの全部が清瀬の極小部分であつてくれ、ばそれで死ぬよりもうれしかつたものなの。わたしの自我は、清瀬のものとなりさへすればそれで満足だつたの。ところが、長くなじむにつれて、清瀬は知らず識らずのうちにわたしを感化しはじめ、わたしのうちに、没却されてゐた個人としての自我をつまきはじめての。清瀬が帝王でありわたしが奴婢である戀をぶちこはして、帝王のやうに偉大な清瀬の自我に悠々對抗してびくともしない女王のやうな自我をわたしの内部に自覺めしめ、そしてそれを育て上げはじめました。そして、わたしがわたしであることを明瞭に把握し、世界が新しくなり、すべての物象かはつきりその地位によつて理解されるやうになると、もう、清瀬とわたしとは一つのものではなくて、清瀬は清瀬、わたしはわたし、どんなにしても一つになることはできないことになつてしまつてゐたの。しかも、わたしは清瀬を愛する以上、清瀬は永久にわたしのものなので、清瀬が一年かへるまいが、十年かへるまいが、



一生かへるまいが、わたしにその一念の消滅しない限り、わたしは悠々一人で、世間から見れば寂しく、しかもわたし自身から云へば、清瀬と一緒に生活してゐるよりもつと充實してゐることができるとは云へば、尤も、無我夢中の時代の、あの華やいだ、若い官能の快樂は求められないにしても。

みや子。あなたは、えらいことを仰有います。しかし、わたしならば、先生が京都へいらつしやれば京都へ、東京の旅舎にいらつしやればその旅舎へでかけてゆくのですのに。あなたは、先生が、支那からおかへりになつても、現に東京へ来ておいでになつても、お會ひにゆくともなさいません、そして、一人寂しく残つていらつしやいます。女はもう少し情にもろい、情にほだされたところがあつてもよいもののやうにわたしは考へます。

音羽子。さう云ふことばをきくと、熱い血が行く方も知らずにとよめいてゐたむかしが忍ばれて來ます。今のわたしは、そんな盲目的なことが何一つできなくなつてゐる。たゞ、自分の最高の命のまゝに、孤獨な命を守り立て、ゆくことよりは。わたしが、清瀬の自然に歸つてくるのを待つだけの底力と強い自信を持つことができず、迎へにいつたりすれば、それによつて、わたしわ清瀬を連れ戻して來て、一時はこの寂寥を慰めることもできませう。一時は、俄るき

つたわたしの官能に満足な快樂を與へることもできませう。その代り、このしつかりと把握してゐるわたしの自我は消えて失くなります。そして、永久的な自我の代償として獲た快樂もにぎやかさも、それは極めて短い有限なものに過ぎません。永遠な盡きることのない自然な運行為、私の情慾からねじまげ、そのリズムを小さく細かくして、わづかに獲られる快樂や短い花火のやうな幸福は、わたしにはもう満足できませんの。それを知らない、若い情熱丈けに充たされてゐる人はそれでよいの。しかし、一度わたしのやうに寂しい、永久的な幸福を知つたものにとつては、それは罪惡です。罪過です。本統に戀を完うする道ではありません。だからわたしは自分を不幸だとは云ひません。しかし、あなたや綾さんを見ると幸福だとは思ひます。といつて、あなたや綾さんの世界へかへりたいとは思ひません。しかも、わたしは、いつも死ぬほど辛い寂寥に悩まねばならないのです。

みや子。あなたは、聞いてゐても苦しいやうなことを仰有います。それは、莊嚴で神聖な感じさへします。それだけわたし共などは口もきく資格のない世界でございませう。あなたと清瀬先生の戀は、もはや人間の戀ではなくて、人間以上の戀ですわ。あなたの呼吸していらつしやる王國から見れば、わたし共は何んでせう？ 巨人と一寸法師との差どころか、もつともつと根

本的な質の相違です。でも、そんなに高い世界にお住ひになることは、どんなにお淋しいことだらうかと、そのお淋しさだけは想像できますわ。

音羽子　　なんだか、あなたの話をきいてゐた筈なのに、わたしの身上へ話が移つてしまつたのね。そんな話はどうしないこと。何時でせうかしら。

みや子。　（柱の時計を見上げ）　もう四時二十分前ですよ。（ふと思ひ當つて）　演説會ももう終へる時分でございますわ。ほんとに、今度は、廣野といひ、わたしといひ、あなたや清瀬先生にお世話をかけました。

音羽子。　（冷やかに）　いゝえ、みや子さん、わたしや清瀬は何にもしてゐはしません。あなたの兄さんの眞太郎さんの御盡力ですよ。眞太郎さん御夫婦には、今度の事件ばかりでなく、それは、深いお世話をかけてをりますよ。

みや子。　（心配さうに）　演説會は、無事に終つたでせうか。

音羽子。　さうですわね。今まで何の報せもないことを見れば、大方無事に運んだのでせう。當局でも、さう減多に手を下して、事件を大きくしてしまつて、手のつけられないやうな事件にする氣遣ひはないでせうね。今度の演説會は、労働者の團體と清瀬達の思想家、社會運動者との

聯合ですからね。それに、世間の輿論が、廣野さん達の破壊行動には十分同情してゐますからね。——恐らく無事にもう終つたことでせうよ。

みや子。　それで、先生はやはり、あなたのおところへお歸りにならないのでせうか。

音羽子。　多分歸つて來ないでせうよ。歸つてくれば、此家は清瀬の家なんだから、わたしは清瀬の愛人なんだから、どんなに喜んで迎へるかshれない。歸つてこなくとも、清瀬は清瀬の勝手なんだから、わたしの知つたことではない。

みや子。　奥さま、先生はあなたの迎へにいらつしやるのを待つてゐらつしやるのかもしれないわ。

音羽子。　（微笑）　そんな子供らしいエロチックのかけ引きで、わたし共は生きてゐるのではないの。ほゝ、みや子さんはいゝわね。ロマンチックで、美しくて。

みや子。　（頬を赤め）　でもね、奥様、先生は京都から若い美しい方を連れて來ていらつしやるさうですわ。

音羽子。　清瀬は男ですから、生きた人形が必要なんでせうよ。わたしも、一時は生きた人形でもあつただから。

みや子。 さう仰有いますと、わたしや綾さんなども人形なのでせうか。

音羽子。 いゝえ、あなたと廣野さん、綾子さんと眞太郎さんは、お互に仲のよい、うらやむに堪へたよい御夫婦ですとも。少くとも、現在のやうに、どちらが一方を見下すといふ態度もなく、お二人が一つになりきつてゐられる間は、少くとも、お二人にとつては世界中で、お互ひが一番深い一番氣のゆるせる、一番尊敬できる、一番善い人である限りは。どちらが人間で、どちらが人形であるわけはないぢやありませんか。わたしも、はじめは、清瀬との仲を、あなた方の戀のやうな變仲だと思つてをりました。ところがさうではなかつたの。清瀬は、少くとも、その人生觀から云へば現代の人類を超越してゐます。清瀬から見れば、現代の人類はことごとく人形ですの。現代の文明は人形のガラクタ文明ですの。——わたしは十七億の人形類のうちで、少し清瀬といふ偉大な超人のお氣に召した美しい人形の一人だつたのです。清瀬と對等の戀をするには、清瀬丈けの高い境地、清瀬と同じ偉大な人格者とならなくてはならぬことを、わたしに自覺させてくれました。その結果が、二人はお互に愛し合つてゐればるほど離れてゐるといふやうな事になつてしまつたの。だから、人形といふも、生きた人間といふも、相手次第の相對的なものとも云へますわね。開放されたノラをさへも、尙且つ人形と見る男が出

てくれば、やはりそのノラだつて人形ですからね。

みや子。 では、あなたには、今時の男は大てい人形に見えるのですの。奥さん。

音羽子。 それは申し上げられせんわ。たゞ、わたしの愛する人は、どうしても清瀬一人であることだけは、動かせない不拔な事實ですの。

(門口より綾子急ぎ足にて歸り来る)

綾子。 (上り口から) 奥様、いらつしやいまして。みや子さん。

みや子。 (音羽子に) 綾子さんらしいわ。演説會が終へたのですわ。——

音羽子。 どなた？ 綾子さんですの。

綾子。 えゝ！ (玄關より、音羽子の部屋へ入り来る) あゝ、急いで來たので、とてものことではなかつた。

音羽子。 演説會は無事に終つたのですか。

綾子。 無事に、しかも近頃になく盛大に。(席をとる) 少し落着かして下さい。そして、わたしの胸いつばいな歡喜と今日の情景を話して下さい。(音羽子、茶を入れて二人にすゝめ、自分ものむ)  
音羽子。 どんな様子だつたの、話して下さいな。わたしよりも、みや子さんのために。

綾子。 いゝえ、奥様、みや子さんのためにも、話さなくてはなりませんけれど、今日はあなたのためにも話さねばならないわけになります。(たへきれず) 奥様、先生はもう直き、演説會の歸りから直ぐに、此家へお歸りになりますの！

普羽子。(感動を制へた冷淡さで) さう、もしそれが本統なら、わたしは別にそれに對して不服はありませんわ。それに、花子も喜ぶことでせう。

綾子。 そんな、不服はない程度の事に過ぎないのでせうか。あなたは、もつともつとお喜びになつてもいゝわけですわ。もし、先生を前と同じに愛していらつしやいますならば！ (少し落着き) 今日、開場は午後の一時といふことでしたのに、もう聴衆は朝のうちから會場の青年會館のあの廣場へ潮のやうに集つて來ました。無理ありませんわ。機械工組合の同盟罷工問題を、支那から歸つて來て、關西にばかりにゐた清瀬先生が始めての歸京をして、だしぬけに論じるのですもの。列をつくるやうに密集した警官の一隊が、制止するのちかすに集まつてくる労働者や青年や民衆の人々を見、そして、その人々が廣野源一とか清瀬豊次郎とかと口々に囁くの耳にしてゐると、わたしは涙ぐまずにゐられませんでした。これでこそ………に出た兄の廣野の志も幾分わくいられたといふものだ、と、さう思ひまして。

みや子。 ほんとに、わたしも見てゐたかつたこと。

綾子。 一時少し前に會場をひらいた時には、もう、あの廣大な青年會館の上も下も、廊下も身動きもできないほどになりました。演壇のうしろには、みや子さん、あなたの兄さんの「開會の辭」丘眞太郎と、「勞働運動に對する國家の責務」清瀬豊次郎、といふ二枚の紙片が風もないのにヒラヒラひるがへつてゐました。寒い冷たい火の氣のない會場を氣にもとめない人々は、少しの時間をおいて、潮鳴のやうに、開會を待つ拍手がおつ、ごおつ、とおきるのでした。その拍手の波のおきる度に、わたしは涙ぐまずにゐられませんでした。この拍手の音が暗い牢屋にゐる兄の廣野の心にもひびくにちがひないと思ひました。眞太郎さんの開會の辭が終つてから、——丘は、すつかり感激してしまつて、ろくに口がきけないのでした。——清瀬先生が演壇にお上りになると、脱帽、脱帽と人々が叫ぶのでした。奥様、流石に豪いものですわね。だつて、演壇の左右に流れてゐた警官の一隊にさへある感動の色が見えましたもの。清瀬さんは、演壇に立つてからも、しばらく黙つて立つてゐました。拍手の波が今更のやうにおきるので、誰れか、女蕩しと叫ぶ者がゐましたが、直ぐにつまみ出されてしまひました。そして、初めは靜かで、だんだんに底力のにじみ出る清瀬さんの演説がはじまつたのでした。人々は、要々で

熱狂した拍手を送るほか、森然と水を打つたやうに静まりかへつて聴いてゐました。あんなに熱心なあんなに静かな演説會はわたしは見たことがありません。警官達も一度も中止や解散を命じようとはしませんでした。

音羽子。　どんなことを、清瀬は話してゐたの。

綾子。　國家の存在は現實の事實であり、私共は國家を否定はしない、しかし資本家と労働者の闘争に關しては國家はどこまでも嚴正中立でなくてはならぬ。國家が嚴正なる中立者でなくなる處に、労働運動は直接行動に變ずる。労働運動を最後の手段たる直接行動に變ぜしめ、これを未然に防ぐ能はなかつたことは一面國家の責任でもある。今度の廣野源一等の事件もすでに發生し勃發してしまつた破壊行動であるから、國權の發動は止むを得ないが、法は執行を猶豫することもできる。もし、あまりに苛酷なはきちがへた峻嚴を實行するやうな場合には、忠良なる全民衆と全労働者は、はじめて國家否認の傾向に陥り、いかなる事變が、起きるかはかりがたいとい。——とふやうな論理で、大きく、政府と資本家をにらまへていらつしやいましたわ。みんなは、深い感動に、拍手しながら溜息をもらすといふ有様でした。それに演説が終つても、聴衆は一人として青年會館を去らうとはしません。警官達も萬一のことが恐ろしかつたもの

か、強制的に退場を命じかねてゐるのです。なるほど、こんなに深い信頼と熱烈な感動が存在し得るなら、××も實行が不可能ではないといふ想ひが、わたしの胸にもきざしましたが、聴衆全體の胸にもきざしたに相違ありません。しかし、最後に、清瀬さんが、今日はこれで會がすんだのだから、おかへり下さい。といつた時には、みんなは、清瀬君萬歳！　と、いままでこらへてゐた、何とも知れぬ、いかなる事をも敢行し得る猛烈な感情を一度に爆發させるのでした。そしてみんな、雪の積つた夕方近い街を一人一人淋しげにかへつてゆくのでした。あのがらんとした會場へ窓の色硝子を透して、弱い冬の日が射してゐました。わたしと眞太郎とは、ほつと息づいて、何となく、うれいのか悲しいのか分らない氣持になつてゐました。別室で、労働者の重だつた人達に圍まれ何か言葉少なに答へてゐた清瀬さんが、ぬつと、わたし共のゐる小高い壇のところへ來られました。どうして、その時、想ひついたのでせう。と言つたのです。眞太郎が、悲壯な面持で、今日は音羽子さんの家へおかへりになるのでせう。と言つたのです。すると、清瀬さんは、しばらく黙つてゐましたが、かへらう。と仰つたのよ、奥さま。わたし達は京都でも、又、今度上京なさつてからも、機會のあるごとに、おかへりになるやうおすゝめしてゐましたが、おきゝいれにならなかつたのです。それなのに、今日といふ今日は、かへ

ると仰有つたのよ。支那へおいでになるためにこの家をお出になつてから、もうかれこれ一年にもなりませうか。それでも、清瀬さんは、あなたの懐へおかへりになるのですわ。——わたくしが、みや子さんのためばかりでなく、あなたのためにも話すと申すのに無理はないでせう。

音羽子。かへる。わたしのところへ。——でも、あてにはならない氣もしますのね。

綾子。いゝえ、もう追つつけ、眞太郎といつしよにおかへりになりますわ。わたしは、それをきくともう、有頂天になつて一足先きに駈けて來ましたの。奥様、わたし共ばかりに歡ばせず、あなたも、もつとお喜び下さいな。でないと、折角、駈けつけて來た張り合ひがないぢやありませんか。

音羽子。だつて、何もそんなに、喜ばねばならぬわけはないぢやないかい。(半ば獨り言) さう、そんなに素晴らしい盛んな會だつたのかい。(間)そして、わたしのところへかへつてくる。(ふつと氣のついた風で)この素晴らしい豪勢な成功の餘威を驅つて、帝王のやうな權威をもつて、わたしのところへかへつてへる——。わたしは、その彼を待つたために、一年の間、花子を育て、獨りを守り、節操正しく待つてゐなくてはならなかつたのだらうか。去年の秋、宮川久子さん

がわたしに舞臺へ出ることをすゝめに来てくれた時は、そのことが、ひどい侮辱のやうにも感じられたものだつたが、(間)いゝえ、わたしは、今のわたしとして清瀬に會ふのが一番よいのでせう。一時的な民衆の人氣などよりも、しつかり自分一人を把握しつくした、シーンとしたこの靜かな今のわたしの方が、ずつと強くずつと内的には豊かで充實してゐるのだから。(綾子に)わたしは喜んで清瀬を迎へますわ。

みや子。わたしも奥様、お喜び申し上げますわ。

音羽子。(しみじみと)そんなに、喜んでいただくやうなことではないのだよ。でもね、今度、廣野

源一さんが出獄<sup>かへつ</sup>て來られるやうな時には、それこそ、わたしは喜びしますわ。

みや子。(悲しげに)廣野に今日の様子をきかしてやりたうございます。

(戸外を大ぜいの人の話聲がする。清瀬、眞太郎、労働者私服の探偵等の一團かへり來る)

綾子。おかへりになつたやうですわ。(立上る)

眞太郎。(戸を明け、はいる)綾子! みや子!

綾子。はい、(みや子と共に立ち、玄關に出る)おかへりなさいまし。

みや子。兄さん、おかへりなさいまし。

眞太郎。(みや子に) 素晴らしい會だつたぞ。廣野もさぞ本望だらう。

みや子。綾子さんからきいて、喜んでみました。ほんとに、わたしは感謝しますわ。

眞太郎。(綾子に) 音羽さんは?

綾子。いらつしやいますわ。(清瀬に) おかへりなさいませ、さつきから、お待ち兼ねでございますわ。

清瀬。(上り) ふむ。

綾子。(一同の者に) 皆さん、どうぞお上り下さいまし。粗茶など差上げますから、本統にみなさん、御苦勞でございました。

(この間に、音羽子、次の奥の間へ去る。舞臺、少しく廻りて、第一幕と同じき部屋、全面的にあらはれ、今までの部屋は左手後方に遠く見え、人々の茶をのみ話す様のみ見ゆ)

音羽子。(花子の眠つてゐる小さき寢臺の傍にすわり) どうとうあの人は歸つて來た。それなのに、わたしは、少しもうれしくはないのかしら。いやいや、わたしは全心をあけて喜びたがつてゐるのだけれど、あの方が、今日のやうに、こんな風に、あの方の偉大さを背負つてかへつて來られると、わたしの内部の、あの方によつて目覺めさせられたものが、喜ぶことを無理にも制へ、

苦い、冷淡な、誇りの高いわたしにしてしまひます。あゝ、あの方がよるべもなくなつて、わたしの懐へ、最後の逃げ場としてかへつてくるのでしたら! わたしは、どんなにいそいそと出迎へることか知れないのに! (花子を見て) 花ちゃん、花ちゃん、ほゝ、この子は何もしらずに眠つてゐる。唄ふか、泣くか、でなければ眠つてゐる。

眞太郎。(入り來り) 音羽子さん、ここにおいでになつたのですか。清瀬さんがかへられました。

音羽子。今日は、いろいろお手數でございました。あつくお禮を申し上げますわ。

眞太郎。なに。これが一生の仕事なんですから。でも、今日は成功でした。

綾子。こちらにいらつしやるのですわ。(清瀬その後より入り來る) 音羽子さん、清瀬さんがおいでになりました。

音羽子。(そちらをみす) さう。今日はいろいろお手數でしたわね。

綾子。いゝえ、(眞太郎と顔見合せ) では、どうぞ、ごゆつくり、わたし達、むかうで皆さんのお相手をしますから。(二人去る。清瀬、默然と立つ。音羽子面上げす)

音羽子。(しばらくして) おかへりなさいまし。

清瀬。あゝ、しばらく留守にしてゐて、すまなかつた。——花子は達者であるか。

音羽子。 ごらんの通り、大さう生長きくなつて、達者すぎるほど、達者でをりますわ。

清瀬。 さうか。それは何よりだ。(よきところにすわり、其をふかす) 留守の間、別にかはつたこともなかつたか。

音羽子。 はい、別に。——横須賀の兄や、宮川久子さんや、眞太郎夫婦が親切に世話を焼いてくれました。(唇をかみしめ) わたしも、舞臺を退いてから、一人で、静かにくらしてゐて、結局、よいことをしたと喜んでゐるのでございますわ。

清瀬。 さうか。わたしも、少し、ゆつくり落着いて、種々考へてもみただけけれど、とうとう一年あまりといふもの、流浪してしまつた。あゝ、資本家の城壁は、音羽子、金城鐵壁だ。今度は、もし、事情がゆるせば、ゆつくり落着きたいと考へてゐるのだ。

音羽子。 それは、結構なことですよ。どう遊ばすも、貴方の御自由なのですから。(花子の頭髪をなでゝる。しばらくして、思ひ返し、しみじみ戀し氣に、清瀬を見上げる。ほのぼのとした情熱が全身に燃えたのである) でも、ようこそお歸り下さいました。わたしは、一生お歸りにならなくとも、一生、一人でお待ちする覺悟でをりました。この一年も、考へて見れば、長い長い、悪夢のやうな一年でございました。(花子をおこす) 花子、花子、お父さまがおかへりになつたのだよ。

(花子眼をさます、抱き上げ) それ、この方はどなたでしょ。花子さんのどなたでしょ。それとも餘所の小父さんでせうか。(羞づかしがり音羽の胸に顔をすりあてる花子の口もとへ、耳をもつてゆく) どなた? どなた? さう、お花さんのパパさんですよ。それではね、パパさんに、おかへりなさいを仰有いませ。

花子。 パパさん、お歸りなさい。花ちゃんはおとなにして待つてゐたのよ。

清瀬。(其を捨て) さうか。何かお土産を買つてくるとよかつたにな。音羽子、かうして、お前に會ひ、花子に會つてゐると、何故か、妙に寂しい、平和な、急に涙もろくなつてしまつたやうな氣がする。わたしも、とうとう一人の子の親になつてしまつたのだね。

音羽子。(勝ち誇れる如く) ほゝ、お父さまはね、一人の子の親になつてしまつた、といつていつしやるのよ。さ、今度はお父さまに抱いていたゞきなさい。

花子。 お父さま。(清瀬、しかたなく抱き上げる) お父さまは、どこへ行つてゐたの。今まで。花ちゃん、いくつ寝たか忘れてしまつたのよ。どこへいつてゐたの。

音羽子。 お父さまは、どこだかわけのわからぬところをうろついておいでになつたのですつて。(音羽子、清瀬、共に苦笑する) あなた、お荷物などは、どうなさいまして。



清瀬。 (眉をしかめ) 荷物などはあとで、若い者が、宿を引き上げてくるだらう。(しばらくして) 久しぶりで、お前のピアノでも聴かしてもらひたいものだ。

音羽子。 でも、おかへりになる早々、ピアノも何んですわ。

清瀬。 なに、——旅にゐても、時々はピアノの音が耳許にひびいて眠られぬ夜もあつた。(打ち消すやうに) 軽いものでよいのだ。久しぶりで、家へかつへてゐるやうな氣になりたいのだ。

音羽子。 さう、それなら、わたし、弾きますわ。

(音羽子、ピアノをひきはじむ、軽快で仄かなる曲。清瀬、花子を抱きたるまゝ、聴きとれる、静かな平和な時間、——しばらくして、次の間で何か騒がしくなる。と、みや子あわてゝ駆け来る)

みや子。 あの奥様。

音羽子。 (弾き乍ら) はい。

みや子。 大變でございます。警察の方が見えて、今、眞太郎さんと何か談じていらつしやいます。

音羽子。 (ピアノをびつたりと止める) あなた、お聞きになりました。

清瀬。 うむ。

音羽子。 (悲しげに) 裏口から、お逃げ遊ばせ、裏口から。

清瀬。 なに、今日演説のことだらう。驚くには及ばない。

(眞太郎、綾子入り来る)

眞太郎。 高等係りがお會ひしたいと言つてゐるのです。面倒だから、早くお逃げになつてはどうです。

清瀬。 なに、逃げて捕まつては、かへつてみつともない。無禮なことさへしなければ、こちらへ通すがよからう。もし、無禮なことをすれば、みんなで、引っぱり出すがよい。

男。 (袴、羽織の男入り来る。丁寧に名刺を出す) 大さう恐れ入りますが、今日の御演説に就いて少し取りしらべたいことがありますから、警視廳まで御同行をお願いしたいと存じます。

清瀬。 ふむ。場合によつてはゆかぬこともないが。

男。 實は、今日の御演説はとうに解散か中止をする豫定でしたのを、特に、圓滿に閉會したわけなので、先生に對しても、あの會場から直ぐに、御同行をお願いしたかつたのですが、それでは失禮だと存じまして、今、お伺ひした次第です。

清瀬。 何んなら、ここで、このまゝお答へしてもよいのだが。

男。 え、でも、わたし共は分らぬことを、高級な人が、せひおたづねしたいと申してゐるのですから。

清瀬。 (眞太郎に) ふむ、それなら、一寸行つて来ようか。

眞太郎。 もしお出でになるなら、わたしも御一緒にお付き添ひませう。

清瀬。 それには及ばないが。——しかし一緒に来てくれるなら、それもよい。いつも御苦勞をかけて、申しわけがない。

眞太郎。 いゝえ。

清瀬。 (音羽子に) ぢや、一寸行つてくるから。(花子をわたす。男に) 今、ゆくから、お前は、あちらで待つてゐろ！

男。 へえ、(去る)どうぞ、願ひします。

音羽子。 あなたは、又、こんなに、直ぐにいらつしやるのですか。

清瀬。 仕方がない、一寸、行つてくる。淋しからうが辛抱してくれ。(聲をひそめ) それから、音羽子、もし、私の歸りが少し長引くやうだつたら、實は、今、京都から、一人、娘を連れて來てゐるのだ。染菊といふ、未だ十八の祇園の藝妓だ。未だ何も知らぬ娘だが、長い間、この私

を眞心から愛してくれた。——今、同じ旅舎にゐるわけだが、その娘の一身を面倒見てやつてくれ。いゝか、音羽子、いゝか。ここに少しばかりの金があるから、これを置いてゆく。そのほかのことは、一切何も知らぬと言つてゐればいゝのだ。

音羽子。 はい。(立ちふさがり) あなた、(すがりつく) もう、お出かけになるのですか。

清瀬。 仕方がない、いつてくる。(音羽子抱きしめ、別れのキス。) それでは、染菊のことは頼んだから、よいだらうな。

音羽子。 はい。

清瀬。 それでは、一寸、いつてくるから。(ゆかんとす)

音羽子。 (ぼんやり立つてゐるが、ふとある考へにおそはれし如く) あなた！ しばらく待つて下さいまし。

清瀬。 なんだ。

音羽子。 もし、あなたのお歸りが長びくやうな時には、わたし、再び、舞臺へのほつてもよろしうございませうか。

清瀬。 わたしは、いつだつて、お前の舞臺へ上るのを止めた覚えはない。

音羽子。あなたは、一度歸つて来て下さつたのだから、あなたに捨てられたなど、言ひふらした世間に對し、わたしの顔を立て、下さつたのだから。もし、今度、貴方が何かの罪でしばらく、おいでにならないやうなことになることも、今日、あなたが青年會館で、廣野源一のために、偉大な聲援をなさつたやうに、わたしは王立劇場の舞臺の上から、愛するあなたに、わたしの命がけの聲援をいたしますわ！

清瀬。お前の熱い心は感謝してゐる。では、さよなら。

音羽子。ごきげんよろしう！ いつまでもわたしはあなたお一人を待つてゐますわ。

(清瀬去る、音羽子、ほっとため息して、空間をみつめ、ある幻想に異様にほゝるむ。)

静かに幕

## 第五幕

湘南のある海邊、小高い丘の上にある、清瀬の別荘。彼は短期間の未決入監の後、ここに静養してゐるのである。早春の日がうつらうつらと射してゐる。青い空、太平洋のゆたかな色、砂丘の代赭色、富士山の紫紺色。床の間には、白木の納骨箱が具へられ、香の煙りがゆらゆら立ちのぼつてゐる。清瀬縁側（縁側）の柱に身を寄せ膝を抱き、真を吹かす、十五六の少年少女、遊びたばむれてゐる。

少年A。(Bに) さあ来い、今度は負けないぞ。

少年B。なに、弱いくせに、空元氣を出したつて何になるものか。さあ、もう一番やつて来い。

(二人組みつき相撲をとる。他の少女、少年達、口々に言ひばやす)

少年B。(Aを投げ轉がして) どうだ。矢張り僕の方が強いだらう。

少年A。よし！ そんなら今度はもう一度とつてみる。

少女一。もう相撲は止すといゝわ。それよりか、今度は綱引きをしませうよ。

少女二。その方がいゝわよ。相撲は一人づつで見てるものはあきちまふわよ。

(傍にある綱を拾ひとり、三四人づつ双方に別れる)

少年B。 今度は己達の組が勝つてみせるぞ！ (清瀬に) 先生、合圖をして下さい！

少女一。 先生、合圖をして下さいな。そして、審判官になつて下さいな。

清瀬。 君達は勝手に遊んでゐるのはよいが、私まで引き出すのは困る。

少女二。 だつて、わたし達ではだめなのよ。お互に喧嘩ばかりして。殊にAさんなんぞ専横を極めるのよ！

少年A。 馬鹿！ そんなことはないぞ、そんな出たらめをもう一度言つてみる、僕はもう仲間へはいらないから。先生、合圖をして下さい。

清瀬。 (そのままにて) よし、いゝか、一、二、三！

(少年少女達懸命に綱を引く、少年Bの組勝つ)

少年B。 どうだ、それしろ！ こんなに君達は引きずられて来たぢやないか。だから、餘り大きなことは言はない方がよいのだ。

少年A。 よし、ぢや、もう一度だ、今度が勝負だ。(味方の者に) みんな、今度は負けないうやうにしつかりしてくれ。僕一人力を入れても君達がしつかりしないとだめなことだ。

(又、綱をとる、今度は一せいに、一、二、三、となへて引き合ふ。少年Aの組勝つ)

少年A。 それ見ろ！ 本當は僕等の方が實力があるのだ。さつき君達が勝つたのは僥倖に過ぎない。ね、(少女一に) 照ちやん。

少女二。 Aさん、もう一度、今度が勝負よ。高言はそれからに遊ばせ。Bさん、憎らしいから負かしてやりませうよ。

少年B。 なに、勝つに決つてゐるのだ。今が勝負だぞ！ ——先生、よく見てゐて下さい。

(又、綱をとる。双方容易に勝負つかず。一同快活に、愉快に、眞剣に大騒ぎをしてゐるところへ、死せる音羽子の兄飯森忠哉あらはれる。暫く少年達を見てゐる。やがて、清瀬と顔を見合せ、「や、」と會釋をする)

飯森。 大層にぎやかなことだね。

清瀬。 (立ち上り) どうぞ、お上り下さい。(少年達に) 君達はしばらく餘所へ行つて遊んでゐてくれたまへ。(飯森に) しばらく御無沙汰してをります。近頃、何處へも出ないものですから。

少年A、B、C。 清瀬先生、さよなら！ あとでまた遊ばせて下さい。(飯森に) 小父さん、さやうなら。ごゆつくりしていらつしやい！ (一同丘をかけ、海邊の方へ去る)

清瀬。 (奥の方へ) 誰れかゐぬか。

染菊。(元の藝妓、素人となれる質素なるうちにも華やかな娘姿の染菊、あらはれる) はい。お呼びでございましたか。

清瀬。座蒲團を持って。——義兄さん、どうぞお上り下さい。

染菊。はい。(座蒲團をもつてくる) ようこそいらつしやいました。どうぞ、おしき下さいませ。

(飯森上り、よきところにすわり、清瀬と對座、染菊次いで茶を運ぶ)

飯森。なかなか、閑静で、景色がよくて、日當りのよい、いゝところだな。(間) 一度見舞がてら来ようと思つてゐたのだが、ほかほかと春らしい陽氣に浮かれて、やつて来た。

清瀬。ようこそ。あなたには、一度お會ひしたいと思つてゐました。

染菊。お茶を召し上りませ。

飯森。うむ。(と見向きもせず)

清瀬。お前は次の間へ下つてゐるがよい。用があれば呼びますから。

染菊。はい、どうぞ、ごゆつくり、失禮いたします。(去る)

飯森。どうだ、こちらへ来て、大分身體は達者になつたか。——一月暗いところにゐた打撃は半年たゝねば恢復できんといふからな。大分未だ瘡せてゐるやうだ。

清瀬。身體はもう殆んど恢復しました。これから温かになるのですから、健康のことは心配は要らないのです。

飯森。さう聞いて、ま、何より結構なことだが。突然だが、健康が恢復し次第洋行するといふのはいつたい本統の事なのか。それともたゞ、世間の噂に過ぎないのか。

清瀬。世間ではそんなに云つてゐますかね。

飯森。己れの耳にした範圍では、世間ではさう言つてゐる。——だが、かうしてお前に會つて見ると、一向さう急な様子も見えないやうだが。今、お前に外國へゆかれては、これまでお前の同志として又子分として、一緒に働いてゐた連中にとつては、随分と不服な點もあるだらうと察してゐたのだ。とにかくお前の出獄て来るまでは、といふ心算で、鳴を潜めた連中が可成りゐるのだから、さう云ふ連中にとつても、目先のことだけしか見えぬ世間から云つても、お前の外遊は可成りに問題とならずにはゐまい、と、私は思ふ。本統にお前はゆくのか。

清瀬。それは、私には今、何とも分らないことです。(間) 洋行も悪くはないが、ここの別荘へかうして落着いてみると、何もする氣がしなくなつてゐます。かうすばらしい春景色に、波の音と松風と、雄麗な富士の山肌と、……

飯森。 ふむ、それあ、こゝは何しろ湘南絶勝の地だ。わしも長らく住んでゐたことがあるが、實際、太平洋と富士山を朝夕見てゐると、この世の自然はすべて不朽不滅なものやうに想はれてくる。あの雄大な山嶽も壞れて土砂になる時があるのかとは、一寸考へ得られないからな。流轉の力も無常の權も迫ることのできぬ永遠不壞そのものの感がするからな。而も、一度は必ず滅びるにきまつてゐるのだと思ふと、凄い寒さを感じさせる。(ほつとして) そこへゆくと、人間はもういものだ。人間の美しさ、氣高さ、偉大さは、むしろいつ滅びるか分らんといふ恐しさの上に價値があるとも云へる。

清瀬。(ほつとして、冷やかに力強く) 人間にはもともと不朽不滅がゆるされてゐないのでせう。眞に美しいものや、眞に善いものや、眞に高貴なものや、眞に偉大なもの、すべて何となく不朽の想ひのするものには一味の寂しみと悲哀のあるものはそのためでせう。滅びるのが當然である人間であり乍ら、不滅なものに到達しようとすることの悲哀と寂寥が。

飯森。 清瀬!

清瀬。 はい。

飯森。 お前はほんとうに外遊を實現するのか。それを、この己に丈けきかしてくれぬか。

清瀬。

洋行のことは私自身にも分らない問題です。何れ、したいとは思つてゐますが、それに、洋行位するのに前々から定めてかゝる必要もないのだから。いざ、ゆくとなれば、本来孤獨な放浪者の私のことですから、それに、音羽子ももう此の世にはゐないのですから、一切を棄て、ゆくだけの覺悟はあります。それ以上、今、私は、どこへもゆきたくはないのです。ここの海邊に、毎日波の音を聞きながら、くらしてゐれば満足です。——あなたにしても、いつたい何時まで生きてゐるか、いつ死ぬつもりか、とたづねられたところで御返答はできませんまいと思ひます。

飯森。 お前が、さう言へば、もう、いはゞ言の果てた話なのだから。併し、己は、死んだ音羽子の兄として言ふべきことだけは言はしてもらはう。清瀬、お前は死んだ音羽子を可哀さうとは思つてくれぬか。お前のために死んだ音羽子を。

清瀬。(沈黙)

飯森。 音羽子を殺したのはお前だ。音羽子は實にお前一人のために命を捧げ盡したのだ。あの音羽子の悲壯な死に様を、己は、實にお前に見せたかつたと思ふ。——お前が、あの演説會の演説のために收監されて間もなく音羽子は、かつては手ひどく拒絶した宮川久子に使を馳せ

て王立劇場の舞臺へ上ることを承諾した。飯森音羽子が一年ぶりで舞臺へ登るといふので、その人氣は、己れのやうな門外漢の耳へも響いて來た位だ。二月半ばの二の替り狂言の初日、音羽子の役はヘッベルのユーディットだ。己れもその日は餘程止めようとは思つたが。蟲の知らせか出かけていつたのだ。あの廣大な王立劇場はぎつしりと身動きもならぬほどの人いきれだ。あゝ、お前に見せたかつたぞ。妹の美しく偉大なユーディットを。そして、お前にきかせたかつたぞ、音羽子の名といつしよにお前の名が囁やかかれてゐたことを。それだけでもお前に對する義理立ては十分だつたに、音羽子は、己れなどが想像さへしなかつたほどに強烈に深刻に、お前を愛してゐたのだ。お前にも想像がつくまいが、音羽子のユトディットが、ホロエフルネスの帷幕の中から出て來て、物凄い辛辣な言葉を述べ立て、ゐるうちに、それは餘りに藝術的で、眞剣で、心熱的であつたが故に、觀衆は、實際、ユーディットの科白にあるものと信じてきいてゐたほどに、凄いことを言ひ出したのだ。あゝ今のわたしのこの屈辱の想ひは、志ある眞個の男兒が、時に利あらず、時の權力者に捕へられ、牢獄につながれる屈辱でもあらうか。あいつはさう言つた。そこまでは、音羽子の藝術に魅せられつくした觀衆は氣がつかなかつた。すると更につけた。わたしはの千萬年の後までも、この宇宙のある限り、たゞ一人の

わたしの愛する人、人類を超越する絶大超人清瀬豊次郎は、今牢獄に繋がれてゐるのです。あの人を空しく獄につないでおくといふことは、それを見て見ぬ振りをする全民衆の意氣地なしを證するものです、あゝ、わたしは、一人で、自分の節操をさへ犠牲にして、猶太の國をホロエフルネスから救つたのでございます。清瀬は一人で、日本を眞實に救はうとしてゐます。そして、皆さん、あなた方は七千萬人ゐても、その清瀬を救はうとはしない！かう舞臺の上から言ひ切つた時は、恐ろしい動亂が、舞臺といはず、觀客席といはず、一時にどよめきわたつた。後見や、今までそれぞれ役割をしてゐた役者どもが、音羽子をおししづめる。わたしは氣が狂ひはしません」といふ。觀客は總立ちになつて、わめき叫ぶ！結局、幕を引いてしまつたが、その夜、己れや、弟子達に守られて家へかへつて來た音羽子は、その夜のうちに心臓麻痺で死んでしまつた。しかも、唇には、かすかなる微笑をさへ浮べて！（間）それも、誰れの爲めだと思ふ、清瀬お前一人のためでないかな。

清瀬。 （深く、潜熱的に） いゝえ、それは、音羽子自身のためです。

飯森。 それではお前は死を賭した音羽子の志をさへ認めてやらぬのか。

清瀬。 音羽子の死が、私のためでも、世間のためでもなく、何人のためでもなくして、實に音羽

子自身一人のための死であつたことを認めてやらなくては、音羽子も可哀さうです。それが、第一義であつて、その餘のことは、その餘の事情は、第二義以下の問題です。

飯森。 お前の言ふことは、よく分らぬが、お前はあいつの志を有りがたいとは思はぬのか。

清瀬。 何よりも、音羽子自身のために嬉しいことだとは思ふが、私は別にありがたいと思ふ必要はありません。

飯森。 それぢやあ、お前は人非人だ。人間であつて人間ではない。あゝ、やつぱり己れの豫想が當つてゐた。實は、今日は、己れはお前に預けてある音羽子の遺骨をもらひたいと思つてな、そのために來たのだ。

清瀬。 音羽子の遺骨は、私が生涯祭つてゆきます。

飯森。 お前は、それでは、音羽子の死んだ骨までもしやぶる氣と見えるな。——私は音羽子の兄として、お前には言うても言ひつくせぬ深い恨みを持たすにはゐられぬ。音羽子がどんなに深刻に熱烈にお前を愛してゐたか、お前にはそれが分らぬと見える。

清瀬。 音羽子は、世界中の女の中で、一番深く、眞實に私を愛してくれました。

飯森。 己れには、その言葉がたゞ、空虚な、内容のない言葉としか響かない。お前の生活そのも

のが、その言葉を裏切つてゐるからだ。お前の生活を少しでもよいから反省してみるがよい、それが、音羽子の亡き靈を慰める業だと云へるだらうか。

清瀬。 私には、不幸にしてあなたの仰有ることが分らない。

飯森。 第一に、それでは問はしてもらふが、今、茶を注いでくれたあの婦人はいつたい何者だ。

清瀬。 あれは私の愛する女です。貞節に、私を見捨てずに、かうした淋しい海邊へまでも、一緒について來て身邊の世話を見てくれます。

飯森。 ふむ、それでは、あれが祇園の藝妓をしてゐた女と見える。清瀬、お前はそれで果して寢覺めがよいか。それで音羽子の靈が浮ばれると思ふか。

清瀬。 音羽子と、染菊と何の關係がありません。音羽子と染菊とは、まるで別の世界の人間です。貴方はさうして、染菊のことに就いて私にお尋ねになることを、音羽子のためだと信じられるかも知れませんが、それ程の侮辱はないのです。音羽子にとつて、一人の染菊位、いつたい何物に値ひするでせう！ 音羽子にとつては、彼女自身と、この私とのほかは、いえ、更に正確に云へば、彼女一人のほかは全世界の全人類の存在は問題ではなかつたのでした。彼女は私のために死んでくれた。しかしそれは「彼女が愛する私」のために、死んでくれたのです。こ



の、眞の自我にまで生ききつた、女性人にして、人間境を突破した音羽子を、染菊と同一水平線上にひきずり下すのは彼女への大きな侮辱です。染菊は、私の自我のうちに全分に吸収されつくされてゐます。しかし、音羽子は最後まで、私とは別な、そして同じ高さを持つ一存在でした。私が十の愛をもつて愛すれば十丈けの愛をもつて酬いすには止まなかつた尊敬するに足る一存在でした。音羽子の今度の死も、私の自我と音羽子の自我との白兵戦に、彼女が花々しく討死したやうなものです。私が支那へゆき、京で遊んでゐることに對しては、一年の間舞臺を休み自活し、花子を育て、むくいました。私が染菊を身請して連れて來たことに對しては、よく身の振り方のつくやうに心配して、浮川竹の流れに慣れた身をも、墮落させずに、私の歸りを待たせてくれました。そして、私が青年會館で演説をして、捕へられたことに對しては彼女は王立劇場の舞臺の上から、死をもつてむくいてくれたのです。私が音羽子を愛し、音羽子が私を愛することは、私共にとつては、すでに先決問題であつて、分り切つたことなのです。私共の問題はさう云ふ愛する愛しないの境地を超えた、餘りに深く愛するが故に全人格の闘争にまで進展してゐたのです。私が一人のみすほらしく暮すよりか、かうして私のために器局相應の愛をもつて待つてくれる染菊とともに幸福にくらすことを音羽子は望んでゐます。

そして、又、その音羽子の遺骨を眞に祭る資格のあるものは廣大な世界にこの私よりほかにありません。

飯森。 ふむ、己れにはお前の言ふことが、たゞの身勝手とよりしか響かぬがな。——世間では、お前が音羽子を失つた寂しさをまぎらすために、永久に日本を去るとまで囁きをしてゐる。己れは、もしそれが事實ならば、音羽子の遺骨と忘れがたみの花子と丈けは、お預りしたいと考へてゐる。——しかし、かう暖かで、風景のよい土地に、美しい若い娘と二人ぐらしでは、一寸洋行もできにくからう。はつはつ。

清瀬。(沈黙)

飯森。 もつとも、お前のやうな危険至極な人間は、かうしてゐても、どんな危険なことを企畫してゐるかそれは分らぬが。お前の今日までの行動を見てゐるに、すべて積極的な實行はすべて黙つたまゝで實行するらしいから。はつはつ、清瀬！ お前が……として生れず、北國の雪に埋れた片田舎に生れて來たことは一つの不幸だ。お前のやうな男が孤獨で——にすわつてゐてみる、天下は畏怖して一人の顔を上げ得るものもなからうにな。せめて、お前をもつと茫洋たる大陸に生れさせたかつたよ。清瀬、花子と、殊によつたら、その染菊と

やら云ふ女の身も立つやうに引き受けるから、一つ世界といふ廣大な舞臺へ乗り出して見ないか。

清瀬。 私は、今、どうしようとも考へてはをりませぬ。いつたい、貴方が、さう、私の生活の内容にまで立ち入つて世話をつくされることを、むしろ迷惑に感じます。

飯森。 ふむ、私のことは私ですから、かまつてくれるな、といふ言分だ。しかし、さう言ふわけにもゆかぬ。(間)それでは清瀬、いつそのこと、今の染菊と正式に結婚してしまはないかな。

清瀬。 あなたは、何とかして、私を片を附けてしまひたがつてゐられる、しかし、生きた人間は、死ぬまで、かたがつきませぬ。世間は定評と云ふものを作りたがる。しかし、生きた眞人は、人間を突破するもの、死ぬまで、自分ながら、どうなるか、何になるか、わけが分りませぬ。染菊との結婚など、今更そんなことをしなくとも、事實結婚してゐるのだから。音羽子も喜んでゐてくれることだらう。

飯森。 結局、己れは、お前には敵はないと云ふより仕方がないが、——戀し合ひ愛し合つて同棲してゐるといふこと、結婚をするといふこと、は、同じことのやうで、その實、大變な差異

があるのだ。單に同棲してゐる丈けでは、結局一人であることに過ぎぬ。孤獨は自由で奔放で孤劍三尺天下を横行し、五尺の小軀宇宙を睥睨することもできるけれど、ヌキサシのならぬ、地に足のついた實勢力を作る道ではないのだ。結婚は俗化の第一歩であり、地に足のついた實勢力を形づくるの道である。お前もよい加減、實人生の正午期に入る用意が必要であらう。お前は己れとちがつて、事實に於て今の日本を背負つてゐる責任のある身だ。お前以後の若い時代と新しい勢力は、ことごとくお前の教訓にしたがひ、お前の歩む道を歩まうと心掛けてゐる。この際、お前が、妙に回避的な態度に出てくれば、ここまで引つ張つて來た民衆と青年をお前はどうするつもりなのか。

清瀬。 しかし、私は私自身をいつはるわけにはゆかぬ。四五年來芽をふいてゐた懷疑的な分子が、今、可成り力強く私の内部に力を得て來てゐる。結局、どつちにしても同じことであるやうに思へてならぬ。どうしたものか、どうしたつてい、どつちにしても同じことだ。どうもできぬ、といつてどうかしなくてはならず、どうならうとどうでもよい! ——考へて見れば、音羽子の死は、私にとつては致命傷だつた!

飯森。 さう言つてくれ、ば己れもうれしい。そのお前を救ふ方は、極めて俗的な結婚の束縛より

ほかにないと思ふのだが。

清瀬。(悲しき微笑) それしきことで、救はれ、ば、文句はないのだが。

飯森。しかしな、世間は親切なものだ。世間では、お前が日本に愛想をつかして、もう永久にかへつて来ないものと決めてゐる。ある者は、政府からかへつて来ないことを頼まれて、莫大な金をもらったとも云つてゐる。そして、その日本を去る時期までも世間では知つてゐる。

清瀬。ほう。

飯森。一昨日の横濱入港のH丸の一等船客の中に、一人のすばらしい外國がへりの日本の娘がゐたのだ。しかも、それはたゞの娘ではなく、今、アメリカで、オペラ・ダンサーの第一人者として有名な春日明子といふ娘なのだ。己れは、寫眞丈けしか見なかつたが、何んとも云ひやうのないほど艶麗で、魅力深くつて、愛くるしくつて、しかも溫和な、悠揚迫らないところがあつて、氣品があつて、恐らく日本中をさがしても、あれ丈けの美人はゐないといふ評判だ。しかも、死んだ音羽子に生き寫しだといふのだ。お前知つてゐるか。

清瀬。知りません。

飯森。一昔前の社會主義者の春日昇がアメリカへ逃れて、向うで育てあけた愛娘ださうだ。何ん

でも、今度はあちらで日本のドラマを演るについて、衣裳の仕入れに來たのださうだけれど、僅々一月のその間に、王立劇場へも出るといふことだ。

清瀬。ふむ、——一向私にはつまらない話です。そんな見知りもしない、きいたこともない踊り子の噂なんぞは。

飯森。いや、ところが、清瀬、お前の渡米期は、その春日明子の歸米期と同じでなければならぬ、と、さう世間では言つてゐる。

清瀬。それは又、何故です。(苦笑)

飯森。春日明子をはるばる日本へやつて來たのは、お前を虜にするのも一つの秘密な重大な任務だといふ者がある。そして、恐らく、お前は王立劇場での花に狂ふ蝶々のやうな艶でやかな、しかも、音羽子に生き寫しの春日明子のすがたを見るだけで參つてしまふに相違ない、一月ばかりの間には、お前の渡歐説が、忽ち渡米説となつてしまつて、二人は手をたづさへ、米國の自由の天地にわたり、お前は世界的思想家として、彼女は世界的な踊り子として、楽しく生涯を共にするであらう——はつはつ。

清瀬。(苦笑) 私をからかふのなら、もう止して下さい。それとも、私を楽しませ元氣つかせるの

なら、それ程弱りきつてもをりません。ばかばかしい。——しかし義兄さん、米國と云へば、日米戦争は近い將來に起りませうか。

飯森。

さあ、それは何とも云へぬが、しかし、……ものとの覺悟は必要であると云へる。しかも、現に、……

不可能らしいのだ。もし、……しても、今度の歐洲の戦争から類推して考へると、日本の國力では、……いふのだね、さうなれば、先づ

……なくてはならぬのだが、……現

に、巨砲を天に向けて待ちかまへてゐるのだから、とても難かしくらうな。止むを得ずんば、約一箇師團の兵の決死隊でもつて、いはゆるナポレオン式遠征軍を組織して、……

……、——一師團分の糧食しか輸送できないと言はれてる、——向うを侵略し、向うのパンを食つて戦ふのだなど、氣焰を上げる者もゐるのだが、どう云ふものかな。一度も二度も戦争に行つたやうな連中は、此の頃あふと、よく、ニコライスクの虐殺の話をはじめ出してね、あゝ、實に、實に、戦争はいゝな、と云ふのだ。おい飯森、な、おい、とやり出すのだ。戦争になるといゝな、え、尼港の露助などは、……

……のよさは、な、おい、と言つてからに、戦争を讚美する奴もゐる。それはまあ、お前達の仲間で、無暗と火でもつければそれが……思つてゐるのと大差はあるまいよ。いざ、……になるのだと、眞實らしく言ふものもある。尤も、負けはしまいが。はつはつ。

清瀬。

さうですか。(と考へこむ)——世間のでたらめには仕方がない。(沈黙)

(この時、染菊、右手奥よりあらはれる。)

染菊。

あの、どなたか、あなたにお目にかゝりたいと仰有つていらつしやいます。

清瀬。

誰れかな。——知らぬ方なら、なるべく斷つてくれるがよい。

染菊。

はい、あの、未だ若い可愛い十七八の少年の方でございます。——常々先生をお慕ひしてゐる者で、先生の御著作を拜見して、はるばる九州の福岡から訪ねてまゐりましたから、どうぞ會つて下さい、と、さう云つてゐるのです。

清瀬。

(顔をしかめ) 困つたね。私の本を読んだつて、あの「新しき世界への道」か、それとも、

自叙傳のことを言ふのか。今は、誰れにも會ひたくないのだが。それに、どうしてここにゐることを知つたのかな。

染菊。 東京の留守宅へお伺ひして、丘さんに聽いて來たやうに申してをります。——取り込んでゐるからと、斷りませうか。

飯森。 はるばる九州から訪ねて來たといふのなら、唯單に、物好き者といふわけでもないだらう。會つてやることも一つの責務だ。

清瀬。 (染菊に)こちらへ、庭前から直ぐに廻るやうに云つて下さい。

染菊。 はい。(去る)

清瀬。 困る。實に。何を又、持ちこんで來るのか。

飯森。 それでは、己れは失禮する。お前の催眠術にかゝつてしまつて、日米戦争ですつかりし機嫌を直した形になつたが、しかし、己れの云つたことも、よく考へてみておくがよい。そして、何時でも、花子と音羽子の遺骨は己れが預るといふことをよく覚えてゐてくれ。

(立上り去る、その庭前へ、十七八の藪々しき少年芳村あらはれる、染菊もあらはれる)

清瀬。 (染菊に)飯森さんが、お歸りになるさうだ。

染菊。 (履物をそろへ) おかまひもいたしませんで、失禮しました。

飯森。 なに。ぢや、失敬する。お邪魔をした。(去る)

染菊。 御機嫌よろしう。(見送る)

芳村。 (禮をして)清瀬先生でいらつしやいますか。

清瀬。 (縁側に立つたまゝ)私は清瀬です。

芳村。 福岡の芳村一哉と申します。先日お手紙を差上げ、返事がありませんでしたけれど、今朝東京の方のお宅へ上りました。丘さんが、こちらの別荘へのゆけと仰有つたのでやつて來ました。手紙はお受取り下さいましたか。

清瀬。 手紙? ——私は未だ見ない。ま、ここへ上るがよい。(清瀬、もこの座に復し、少年上る)

染菊。 さうか手紙をくれたのか。(庭前に立つてゐる染菊に)最近、東京から轉送されて來た手紙を持て。

清瀬。 (上り、床の間の邊から一束の手紙を出す)ここに一束ございます。(奥へ去る)

芳村。 (しらべ)ふむ、これか。(封を切らうとせず、そのまゝ投げ出す)

御返事を待つてからと考へましたけれど、とうとう辛抱がしきれなくなつて、家を飛び出してきました。それでも、先生にお會ひ出來て、こんなに嬉しいことはありません。

清瀬。 (默然として其をふかす) 私に會つて、それから、どうするつもりなのか。

芳村。 僕は、これから、東京で、何んでもして、その傍ら、自分の志を遂げたいと思ひます。そして、國の奴等を見返してやりたいと思ひます。

清瀬。 東京で何んでもやる、——君は東京に知り合ひでもあるのかね。

芳村。 知り合ひなんかありません。今のところ、僕として、頼るところは先生お一人です。

清瀬。 ふむ、それで學校は。

芳村。 中學五年に在學してゐました、丁度もう四五日で試験がはじまるころでした。はつはつ (と快活に笑ふ) 愉快だつた。みんな、一生懸命に試験勉強をしてゐるのを尻目にかけて、僕は先生のところへやつてきたのです。

清瀬。 君には御両親はあるのだらうね。

芳村。 え、親父も母もゐるのです。親父は福岡の鑛山の電氣技師長をやつてゐるのですが、僕と同じやうに電氣の技師になれつて、さう云ふのです。そして、とても、僕の生來の志を遂げさせてくれようとはしません、だから、僕、僕は僕一人で自分のやりたいことをやるからと、さう思つて、両親に無斷で出て來たのです。——この上は、僕は先生の手許に、先生といつし

よに生活できるなら、何をしてもいいと思ひます。その方がわけの分らない両親に虐められて、ゴムをかむやうな學校へ通つてゐるよりも生き甲斐があると思ひます。——先生、僕を先生のお弟子にして下さい。そして、二三年、みつしり僕を仕込んでみて下さい。(間)僕は先生がいつぞや自叙傳に書いてゐられたのを覚えてゐます、僕も、あんなにして、苦勞がしてみたいのです、そして、死物狂ひになつて勉強して、先生のやうな仕事をしたいのです。

清瀬。 しかし、私が、さまざまな艱難苦勞をして來たのは、別に自分から好きこのんでやつて來たのではない。境遇と運命が必然にさうしてしまつたのだから、私はその境遇と運命との力に對し、負けまいと必死の戦ひを戦つただけのことだつた。

芳村。 僕だつて、僕の境遇と運命から超脱しようとして、今、かうして先生をお訪ねしました、どうぞ、僕を助けて下さい。

清瀬。 (ほつと溜息をつく) 芳村君、君はいくつか。

芳村。 僕は十八です。

清瀬。 御兄弟は、ある？ ない、一人も、ほう。

芳村。 先生、あなたも御兄弟はないのでせう。してみれば、僕を末弟の一人として、ここに置い

て下さい。僕は何んでもします、何んでもお手傳ひします、置いて下さい。

清瀬。 (しばらく沈黙) それは、一寸出来ません。

芳村。 何故です、何故いけないのですか。

清瀬。 あなたは、そんなことをする必要がありません。

芳村。 どうして、どうしてですか、先生。

清瀬。 さきにも言つたやうに、私の半生涯の辛苦艱難は、自分から求めたといふよりも、むしろ天から授かつてゐるものに過ぎない。だから、私はその辛苦から打ち克たうと努めた。もつと具體的に言へば、君のやうに中學へ親から出してもらへないための、辛苦だつたのだ。ところで、君の場合では、君の両親は立派に君を中學へ出し、更に大學までも入れようとする意志をもつてゐるのだ。たゞ、不足といふのは、君は文學をやらうとするに反し、君の両親は技師にしようとするところにある。しかし、そのことを君の力で支配するには、わざ／＼東京へ出てくるには及ばないのだ。君は、私の處にゐて、そして、勉強をして豪い者になりたいと言ふ。しかし、それは一種の幼い夢だ。君一人のようがるまいが私には何の影響もない、ゐるなら、てもよいと私は思ふ。併し、君はさう云ふことをする必要のない人だといふことを自分でも、

自覺しなくてはなるまいと思ふ。君は今、私の處にゐて、それから、私の世話で、何か東京で職業を求めたいと言はれる、君は私の處にゐたり、殊に、東京で職業に有りつくことをそんなによいことだと考へてゐるのだらうか。君の家庭が地獄なら東京での仕事も亦地獄の仕事だ。畢竟、此の世は地獄なのだ。一個人の純粹な意思にとつては、世界そのものが地獄であるのだ。どこへ逃げていつても、そこが世界であるかぎり、地獄はどこまでも地獄であるのだ。どこかにいゝところが、どこかに極樂が、パラダイスが、ありさうなものとはかない希望は、早く失はれなくてはならぬ。そして、畢竟この世は地獄の王國だとの覺悟はする必要があるのだ。人間に對する立脚地をそこにどつしりすることによつて、すべての事象に對してゆかなくてはならない。——今の問題なども、私が一言助言するなら、君は東京で何か仕事を求めて、そして、文學をやりたいといふ、しかし、君はわざわざ、東京まで来て仕事を求めなくとも、すでに「中學へ在學」と云ふ結構な職業を與へられてゐる。何も苦しんで、外に職業を求める必要はない。今の世の中で、毎日五時間乃至六時間で、一時間毎に十分間の休暇があり、四十餘日の暑中休暇、二週間の冬休み、春夏秋冬には修學旅行があり、そんな結構な職業は、とても見つかりさうもないと、私は思ふ。君は今から國へかへり、試験を受け、もし落第すれば、そ

んな結構な職業にもう一年餘計ありついてをれることを喜んで、毎日「學校勤め」をしながら、その傍ら勉強をなさい。

芳村。 僕は國へ歸りたくはありません。

清瀬。 折角来たのだから、今日はここで、晝食をすまして、それから、東京の留守宅にゐる丘眞太郎君に連れだつてもらつて、東京を見物してくるがいき。そして、三四日ゆつくり見物したら歸るがいき。歸りにくければ、私が、御兩親へあて、手紙を書いてあけてもいき。

芳村。 しかし、僕は國へは歸れない深い事情があるのです。しばらくでもいきから先生のお手許において下さい。

清瀬。 それあ、私の所にゐることは別に悪くはないが、それでは君のためにならないから、社會改革の事業をやるのが眞に君の生涯の志なら、五年や十年の早い晩いは問題ぢやないのだから、私なんぞ、餘儀ない必然的な形ではあつたが、今になつて世に出ることの早かつたのを悔んでゐる位だ。尤も、私の仕事と、君の志と同じには云へまいけれど。——とにかく、私の氣持や、又、君の一生涯全體を達觀して、直ぐにも國へ歸つた方がよいと思ふ。

芳村。 しかし、先生、(言ひよどみ)僕は國へは歸りたくないのです。國へ歸れないわけがあるの

です。ここにおいで下さい。

清瀬。 ——私の言ふことは分つたらうな。

芳村。 え、よく分りました。

清瀬。 それなら歸つたらよいだらう。そして、もし、君に自信のある作物でもできたら、又は君がもつと大人になつたら、改めて、私が世の中へ紹介の勞位はとることにする。

芳村。 でも、僕は歸れないのです。

清瀬。 何故、御兩親へ氣まりが悪ければ、私から手紙を出しておくときから言つてゐるだらう。

芳村。 でも、——實は、先生、僕、僕一人で國を逃げ出して来たのではないのです。(間)僕の愛人といつしよに逃げて来たのです。

清瀬。 (苦笑は微笑に變じ) ほ、う。それなら君の方が、この先生よりも一枚役者が上手かもしれないな。それなら、さうさ初めから言へばよいのに。で、その、君の愛する人といふのは今、どこにゐるのだ。

芳村。 直ぐその停留場の待合室に僕からの便りを待つてゐることとせう。僕が、こちらにおい



ていたゞけるおゆるしを得たら、初めて、僕はとし子と呼んで来て、又、あらためて、二人ともおいていたゞくやうに願ひするつもりだつたのです。(一寸恨めし氣に) それなのに、あなたは、居つてもよいとは云つてくれませんか。そんなわけなのです。とても、二人は國人歸れませんが。だから、お手許において下さい。でないと、二人は死んでしまひます。

清瀬。 どうも困つたな。それで、そのとし子さんといふのは(苦笑)今、停留場にゐるのか。——いつたい、どうしたといふのか、もう少し真相をくはしく言はなくては分らないぢやないか。

芳村。 別に僕ととし子との間は普通のラブと違つてゐるわけではありません。先生が、初戀のこゝとを自叙傳で書いてをられたやうに、僕ととし子とも亦運動會で仲よくなつたのです。——尤も、僕のとし子は先生の——さんのやうに豪華秀麗な美人ではありませんけれど、しかし、清楚な、そして、どこか愛くるしい少女です。そして、僕には、世界に又とない、いゝ女です。實際とし子を凌駕する美人が百人その前に並んでも、私はやはりとし子のものです、とし子も亦私のものです。——尤も、先生の前いきなりとし子一人を持つてくることは一寸僕、躊躇しますがね。しかし、とし子も先生の著作の愛讀者です。僕がすゝめたのです。實際先生の聖い思想的なものの中には、自由戀愛論とか、結婚と戀愛といふやうなことがありますし、又先

生の自叙傳は、實に何とも云へぬラブシーンでいつぱいですからね。僕ととし子とは、花の咲く夕べ、野原で先生のを一緒に讀みながら、温かいキッスをとりかはしました。——だから、とし子は先生を尊敬してゐます、だから、僕、その點安心してゐますよ。尤も先生の方からアクトブに出られては一寸困りますけれど、しかし、先生には初戀のわか子さんや、有名な音羽子夫人や、今の方のやうなとし子さんとは比べものにならぬ人がゐるのだから。——

清瀬。 もういゝ、もう止すがいゝ。おい、染菊、染菊!

染菊。 はい、お呼びでございますか。

清瀬。 今から、直ぐに停留場へいつて、十六七の女學生風の少女がゐたら、とし子さんかとなつねて、直ぐに、私の名と、私のところで、——何んといつたけな、芳村一哉、いゝか、芳村一哉君が待つてゐるからといつて同道して来てくれないか。直ぐに。

染菊。 はい。

芳村。 先生、だめなんです、僕が一筆書きますから、さう云ふ約束になつてゐるのです。

清瀬。 ふむ、それなら書くといゝ。(少年何か書いて渡す)

芳村。 どうも、お手数をかけてすみません。

清瀬。 とし子さんか。(苦笑)それで、その人も學校を中途にして來たのか。

芳村。 え、さうです。僕の家とし子の家とは、同じ屋敷街にありますから。——なに、とし子の方は平氣なんです。とし子には姉が四人妹三人もゐるんですから、一人位僕がひつぱつてきたつてビクともするもんぢやないのです。

清瀬。 はつはつ、妙な論理もあるものだな。(染菊に)すつかり、私の學説の實行者が出來たわけだ。そして、その鮮やかさはむしろ、私以上といふわけだ。何しろ、女をいつしよに連れてくるのだから、夫婦づれで、私の家へ押かけ居候にくるのだから。はつはつ、御苦勞だが行つて來て下さい。(染菊去る。清瀬、少年に)とにかく、その君の愛人が見えてから、ゆつくりもう一度相談するといふ。その上で、なるべくなら、國へ歸ることにしたまへ。——さうか、いつしよに連れて逃げて來たのか。その點はほめておく。さう云ふことは、物事を考へるやうになると出來にくくなるものだ。まづ、失戀をしなかつた丈けは君の成功だ。少し露骨だが體からだの方の關係はどう云ふ風になつてゐるのだ。

芳村。 國を出る時までには、ありませんでした。キツス位は眞似事をしてゐましたが。——しかし、昨夜、京都の宿屋に泊つた時、僕はとし子を知りました體からだをも知りました。——先生は、女性

にとつては、百度の談話よりも一度の抱擁の方が効能がある、と何かで書いてをられたやうでしたのを唯一つの頼みにして。でも、とし子が、ほんとうに、どこまでも僕と共に歩いてくる覺悟も、昨夜やうやくついたらしいのです。それまでは、京都へいつてからも、始終國のことばかりを話してゐてしようがなかつたのです。

清瀬。 ふむ。——唯一言、云つておくが、君はとし子さんを捨て、はいけない。このことだけは私の前で誓つておく必要がある。

芳村。 え、それは、もう、そんなこと、分りきつた話ですから。あ、僕は矢ッ張り先生をお訪ねしてよかつたのです。このまゝ國にゐては、僕は當然破滅してしまつたに相違ありません。何故なら、僕は、父や母の云ふことを無視して殆んど學校へ出席せずに、野山をぶらついて好き勝手な本ばかり、殊にこの最近の半年あまりは先生、あなたの本ばかり讀んでゐましたから。そして、とし子をそそのかして同じやうに學校を怠けさして、僕といつしよに歩かせてゐましたから、試験は落第するにきまつてゐるのです。両親は狂氣のやうに僕をせめるでせう。そして、とし子との仲も、どうなつたか分つたものではありません。このせつばつまつた際に、力を與へ、無謀と知りつゝあくまで自己の意志を生かさうと念じさせたのは、先生の存

在でした。先生が此の世にゐられることは、僕にとつては難破船にとつての燈明臺でした、僕はその光を頼りに航海に出ました、そして、そのことが善いことであつたことは、たとへ、先生が僕達をおいて下さらなくとも、信じ得られることなんです。——少くともし子を僕自身にしつかと結びつけたことだけでも。

清瀬。 ふむ。——ま、それでよい。少しゆつくり休むがい。九州の福岡から来たのなら、富士山は初めてだらうが。

芳村。 え、生れてはじめてです。富士山の雄大さ、優美さにはうたれました。しかし、この海邊風景は、何んだか、少し明る過ぎ、あまりに廣すぎて、僕には何となく堪へがたい氣がします。それでゐて、淋しいのですから。

清瀬。 ふむ、君はい、素質をもつてゐるらしいな。

芳村。 北九州のはてから、僕は先生の千分のうちの四天王位にはなるつもりでゐました。今も、そのつもりでゐます。

清瀬。 はつは、愉快なことを云つてゐる。一寸面白い奴だな。とし子さんを停留場に待たしておくなんぞは一寸凄いとところがある。——

芳村。 先生、僕は先生の自叙傳をよんでつくづく考へてゐました。何故、何故、あの時あなたは、あの人を、今のあの新しい奥様のやうに征服してしまはれなかつたのかと、それが残念に思はれます。今からでも、あなたにその意思さへあれば、いくらも、僕達四五人が力を協せて、あの人一人位どこか外出の折にでも、引つかついで来たところで知れてゐるのですから。あの人、人は確かに先生にまゐつてゐたのですから。むしろ、先生が「暴力をもつても」といふ位の態度に出られないのが、あの人一つの不平であり、もしや、わたしをだましてゐるのではなにか、といふ疑惑の素因だつたのですから。女といふものは、男の押してゆく力の強さによつてどうにでもなるものである。と仰有り乍ら先生は妙に中途で遠慮深くなつてしまつて、結局、あの人にとつても、あなたにとつても、チグハグな妙な状態になつてしまはれたやうです。僕は惜しいことだと思ひます。

清瀬。 何を言つてゐる。自叙傳に書いてあることは、あれはみな、十年も前の話だ。その頃の私には私の考へもあつてのことだつたのだ。

芳村。 へえ、十年も前のお話なんですが、それでは、今、先生が洋行なさるといふお噂は、それは、ほんとのことですか。それとも、それも、十年も前のお話ですか。

清瀬　なに、いつ洋行するときまつたわけではない。といつて、洋行しないと定めたわけでもない。そんなことはどうでもよいぢやないか。私は、今、ここに、この別荘に君達と話しあつてゐるのだから、それでいゝではないかと、私は思ふ。

芳村　でも、(と、何か言はんとするところへ戶外で足音)先生、奥様と、とし子が、やつて来たやうです。ね。――

清瀬　染菊かい。

染菊　はい、さやうでございます。

清瀬　こちらへ直ぐに廻るとよい。

(染菊、少女とし子を伴つて縁先のところへ現はれる、とし子は愛らしき束髪、十六七のほつそりした利發らしき美少女。一寸ためらつて入りかねてゐる)

芳村　(少女とし子をみて顔を赤らめる)あ、とし子さん、清瀬先生です。

清瀬　こちらへお上りなさい。

とし子　はい。(顔を赤らめ、少しまごつく)あの、わたし、はじめてお目にかゝります、とし子と申します。

清瀬　こちらへ上るとよい。

染菊　(とし子に)さ、お上りなさい、先生はそんなことに遠慮なさるのはお嫌ひですから。

とし子　(とし子上る)御免下さいまし。(少しはなれてすわる)

清瀬　(染菊に)御飯の支度をしてくれないか。お午はみんないつしよにするやうに。

染菊　はい、すぐにいたしますわ。(とし子に)ではゆつくりなさい。(去る)

(一同沈黙、少年しきりに何か言ひたげなるも、言ふ能はず、この時、垣根の外で、さつきの少年A、B、C、少女一、二、三等ひそかにうかがひより何事か囁やき、のぞいてゐる)

清瀬　よく、一人で待つてゐられましたね

とし子　(清瀬と少年とを等分に見比べ)初めはそんなに心細いとも思ひませんでした、だんだん淋しくて、泣きさうでしたけれど、仕方なしに待つてをりました。そこへ、先生の美しい奥様が迎へに来て下さいました。

清瀬　(ちいつと少女をみつめてゐたが、ふと音羽子の納骨箱に眼を轉じ涙ぐむ)これから、あなたはどうかうと考へてゐるのか。

とし子　わたしには分りません。しかし、わたしは一哉さんを信じてゐます。そして一哉さんと

いつしよに先生、あなたを信じてゐます。わたし達の運命のゆくてを教へて下さいまし。——  
 どうなることか、わたしに分りやうはございません。

清瀬。 それは私にも分らないことです。

芳村。 (とし子に) とし子、いつしよに、先生にお願いしておくれ。先生、二人で何んでもし  
 から、とし子と僕と二人をお手許において下さい。僕は先生の御著作の清書でも筆記でも何ん  
 でもしますし、とし子も奥様のお手傳をするでせう。そして僕達二人の運命の健やかであるや  
 うに僕達を見守つて下さい。

とし子。 一哉の申すとほりに、先生、お力添へ下さい、わたしは、先生の美しい奥さまとも、も  
 う仲よしになつていたきました、あの美しい奥さまといつしよに先生のお世話をさして下さい  
 い。そして一哉と一しよに、いつまでもお傍において下さいませ。

清瀬。 さあ、私は、明日をも知らぬからだだから。

芳村。 いゝえ、先生、あなた御自身のためよりも、寧ろ僕ととし子を助けるためです。僕は今更  
 とし子をつれて出て来た故郷へむむむ歸るわけにはゆきません。両親も先生から、僕ととし  
 子を預つたと云つて下されば、きつと安心はしないまでも、どうにかあきらめをつけて、そん

なに心配はしまいと思ひます。そして、僕は勉強して先生の片腕にもなります。私は先生に命  
 を捧げます。

清瀬。 貧乏なくらしをするわけではないが、いつでも貧乏や迫害や艱難にあつても平氣な覺悟が  
 できるか。

芳村。 生きるか死ぬかの瀬戸際に、迫害や貧乏は問題ではありません。

(この時、垣根の外からは、少女一、二、少年A、B等忍びよる)

少女一。 確かに、ここへはひつたに違ひないわよ。それは、すてきな美人だつたわ。

少女二。 わたしも、ちらと後姿は拜見したのよ。清瀬先生はほんとに隅におけないわ。わたし達  
 がいつお訪ねしても、苦い顔をして、うん、さうか、なんて仰つていらつしやるくせに、さ  
 うよ、もうちやんと、あんな美しい奥様がおありだのに、また、東京から、あゝ云ふ方をお呼  
 びよせになつたのよ。今度の御洋行の時なんぞもきつとあの方を連れていらつしやるに相違な  
 いわね、くやしいわね、よ、もつと前へいらつしやいよ、ちよつ、聲ばかりきこえて、まるで  
 言葉が分らないぢやないの。

少年A。 静かにしろ。清瀬先生ばかりぢやないやうだぞ。なんだか未だ男がるるやうだぞ。チエツ

畜生！ 清瀬先生の四天王ここにゐるを知らないでゐるやがるな！ (少年Bに) しつ、靜かにしてお出でよ。

清瀬。 それぢや、芳村君、とし子さん、あなた方は私のところに今日からいらつしやい。及ばすながらどこどこまでも生死を共にしませう。

芳村。 先生、ありがたう！ とし子！

とし子。 一哉さん。 先生、わたしに、奥さまといつしよに、お身のまはりのお世話をさして下さいませ。

少年A。 おい、をい、「わたしにはお身のまはりのお世話をさして下さいませ。」なんて言つてる

よ、——いゝかい、みんな一せいに、清瀬先生、おめでたうツ！ をやるんだよ、いゝかい。

それ、一イニウの三イツ！

(少年少女、清瀬先生おめでたう！ ととなへて庭前にをどり出す、一同おどろく)

清瀬。 誰だ。——なんだ、君達か、人をおどろかしてはいけない。

少女二。 先生、おめでたうございます。美しい奥さまをお持ちの上に、また美しい奥様をお迎へになつておめでたうございますわよ。ほんとに、ほんとに！

少女二。 先生、おめでたうございます。わたし達はお祝ひを申しにまゐりましたのよ。ほんとに、

淋しき海邊の哲人も、よき春を迎へられて、おめでたうございますわ。

清瀬。(微笑) 何を云つてゐるのだ。ま、こつちへ腰をかけたまへ。(一同縁側へこしかける)

少年A。 先生、そこにすわつてゐるその美はしき少女の方に紹介して下さい。

少年B。 先生、そこにすわつてゐるその美はしきスキート、ハートさまに紹介して下さい。

清瀬。 君達は何を考へちがへをしてゐるのだ。このかたは九州の福岡から來た、そして今日から

私の家にゐることになつた、芳村とし子さんだ。——そして、ここにゐるこの少年はとし子さ

んの愛人の一哉君だ。これからは、一緒に仲よく遊ぶといゝ。

少年一。 へえ、——ぢや、先生のおれぢやなかつたのですか。ぢや、つまらないや。ねえ、君、

ぢや、つまらないや。

少女一。 とし子さん、かんにんしてちやうだいな。わたし達はてつきり美しき奥様を持つてゐて

更にその上に持ちたまへる清瀬先生のラブさんと思つちやつたのよ。さうお、でも、いゝわね

え、清瀬先生のお宅にゐられるなんて。これから仲よくしませうね。

とし子。 どうぞよろしくお願ひしますわ。

少女二。 福岡つてかなり遠いわね、その一哉さんといつしよにカケオチして来たのですつて、さうでせう。いゝわね、隅におけないわね。さすがは清瀬先生のお弟子だけあるはね、わたし達だつてイザとなれば、カケオチ位するわよ、ねえ、Aさん！

少女一。 あら、Gさん、あなたばかりぢやないわ、わたしだつてするわよ、ねえBさん、いゝでしよ。え、わるい？

少年B。 それあ、するさ、己れなんかかう見えだつて何んでもするぞ。

清瀬。 (傍の本をとりあげ)みんな、大へん元氣だね。

少女一。 あら先生、その本は何が書いてありますの、その本、見せて頂戴な、よう先生。

清瀬。 何でもないのだ。大へんな時代がやつてくるぞと、書いてあるのだ。楽しみなことだと書いてあるのだ。どうせ、野火をつけるからには、自分のつけた火が、あまりに大きすぎて驚くやうなことになればよいと書いてあるのだ。——さ、一哉君、とし子さん、みんなといつしよに、海岸でも散歩して来よう。こちらの海は太平洋だ。少しは氣持もかはるだらう。——君達もいつしよにおいで。

少女一、二。 どこへだつてわたし共はゆきますわ。先生のいらつしやるところならば。

少年A、B。 僕達も！

芳村。 先生、僕も、どこへでも、どこへでもお供します。

とし子。

わたしだつて、どこへだつて、どこまでも、ついてゆきますわ。

清瀬。

(縁側へ出て庭へ下りる、空を仰ぐ) は、何といふ日本晴れだらう。無限無窮そのもののやうな感じがする。このよい天の下で、君達にとりかこまれてゐることは絶大な喜びである。

染菊。

(襖をあげ出て、微笑みつゝ) あの、あなた、散歩はあとになさいませな。お食事の支度が出ましたから。

清瀬。

一寸、海邊を散歩してくるから、(四人の顔を見くらべながら)それから、もう、四人前こしらへてくれるとよい。(少年少女達に) 君達も食べてゆくといい。

少女一。

だから、わたし達は、先生が大好きなんですわよ。(と、二人清瀬にもたれかゝり甘える)

少女二。

でもね、奥さま！ わたし達の美はしき奥様、あなたも、ごいつしよに、いらして下さいな。みんながお願いしますわ。

染菊。

でもね(微笑みつゝ) わたしは、みなさんの御馳走をこさへなくちやなりませんから。

少年。少女。

奥様、わたし達は何も食べなくともよろしうございますわ。ごいつしよにいらつして

下さいな。でないと、先生がお淋しいですわ。わたし達は今、てつきり、このとし子さんを生  
生の美はしき奥様を持てる上の、更に、美はしき乙女と間違へちまつたのですわ。

とし子。奥様、(頬を染め)先生のお淋しくないやうに、いらして下さいまし。

清瀬。さ、もう、いゝから、そこを離して、え、さ、離して下さい。

少女一。先生、離しますから、奥様もいらつしやるやうに云つて下さい。

清瀬。困るな。(染菊に)それでは、お前も一緒に來るとよい。

染菊。ほゝ、とんだお供を仰せつかりますこと。

少女二。おゝ、何んてすばらしいことだらう！先生と奥様がいらつしやるとは！先生、お離

ししますわ。(と少女二、清瀬にキスして、先きに行った少年Bの手をとる)

少女一。わたしも、先生、離してさし上げますわ！(同じくキスして、少年Aの許にとんでゆく)

染菊。大へんな自由戀愛家達ですことね。(笑ふ。傍のとし子に)とし子さん、あなたも、一哉さん  
といつしよにお歩きになるといゝのよ。この天地は、先生が王様ですから、この國では、好  
きな人といつしよに手をとる位のこととは公明正大で、自由で、善いことなのですから。  
(少年少女、拍手して喜ぶ)

とし子。でも、わたし、羞つかしくつて、みなさんのやうにはできませんもの。それに、先生の  
前ですもの。

清瀬。なに、わたしの前で遠慮は無用だ。

(少年少女歡聲をあげてよろこぶ。そして、少年と少女一人一人、手を引いて丘をかけ下りる)

少年。少女。(丘の下から)とし子さん、いらつしやいな、一哉さんと手を引いてさ！なにをぐづ  
ぐづしてゐるのよ。もつと快活で、元氣よく、いらつしやいな！

芳村。とし子、ゆかう、(清瀬に)先生、ほんとにいゝのですか。

清瀬。あゝ、いゝとも、そら、(とし子と少年の手をしっかりと握らす)この契りに天と地よ祝福あ  
れ！どうだ。はつはつ、そら、往け！(二人丘をかけ下りる)はつはつ、あゝ、愉快だな。  
(ゆるやかに歩み出す。染菊に)さ、わたし達もゆかうぢやないか。

染菊。ほんとに、何んとした愉快な面白いことなのでせう。わたし、京都にゐます頃、この世に  
こんなに明るい、こんなに清い、こんなに涙のこぼれるやうな、こんな平和と幸福があり得る  
ものとは思ひませんでした。

清瀬。むかしのことは言はぬがよい。むかしのことを言へば、誰しも胸が痛むことばかりだ。



とし子。 (息をはずませ) 早くいらつしやいませよ、先生!

清瀬。 (染菊に) そら、もうあんな元氣になつてゐる。どうだ。實に、實に、いと、うら若きものは

ほむ可きかなぢやないか。お前も若がへつて、失はれた少女の日のとりとめない幸福を味ひ返してみるがよい。あゝ、いゝ空、いゝ海、いゝ朝だ。染菊、お前を前にして、かう云ふのはすまないが、私はかうした清い朝、お前と共に、音羽子を見たかつたと思ふ。

少年。少女。 清瀬先生! わたし達新しい時代の王様、未來の國の帝王、清瀬先生! いらつしやいませえ!

染菊。 (柔らかに) みんなが呼んでゐますわ。まゐりませうよ。

清瀬。 (一同を獅子のごとく雄々しく見わたす。手をあげ) ゆくぞお!

少年。少女。 奥様と、わたし達の美しき奥様と、手を引いていらつしやいませな!

染菊。 ほゝ、あんな罪のないことを申してゐますわ。  
(清瀬と染菊下りる。一同熱狂してよろこび、二人を中心に圍みてうしろの丘の陰に一同は見えなくなる。静かである。と、少年と少女の何かしら唄ふ童謡がきこえる。そして、音羽子の納骨箱の前に、香煙は白く、幽かに、且つ寂しく立ちのぼる)

静かに幕

大正十一年 八月廿二日印刷  
大正十一年 八月廿五日發行



革命前後 定價金壹圓六拾錢

著者 島田清次郎

發行者 東京市芝區愛宕下町一丁目一番地 山本美

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八番地 棟原富太郎

發行所

東京市芝區愛宕下町一丁目一  
番地  
電話  
二六三八  
一八五八  
三〇三三

改造社  
振替東京八四〇二番

株式會社 博文館印刷所印刷

芥川龍之介著	尾崎士郎著	中西伊之助著	谷崎潤一郎著	野上彌生子著	志賀直哉著	中澤臨川著	賀川豊彦著	賀川豊彦著	烏田清次郎著
沙羅の花	長篇小説 逃避行	長篇小説 緒土に芽ぐむもの	潤一郎戯曲集 愛すればこそ	彌生子傑作撰集 小説六つ	直哉傑作撰集 壽々々	小説 嵐の前	長篇小説 死線を越えて	長篇小説 死線を越えて	小説 勝利を前にして
上四六製版 送料十九錢	上四六製版 送料拾九錢	上四六製版 送料拾九錢	上四六製版 送料拾五錢	上四六製版 送料拾九錢	上四六製版 送料拾五圓	上四六製版 送料拾九錢	上四六製版 送料拾九圓	上四六製版 送料拾九圓	上四六製版 送料拾四圓

朝永三十郎著	徳平名智太郎編	博士 鹿子木員信共 徳平名智太郎著	中澤臨川著	博士 石原純著	博士 福田徳三著	博士 福田徳三著	尾崎士郎著	阿部次郎著	賀川豊彦著
カントの平和論	ガンヂと眞理の把持	ガンヂと眞理の把持	電子説から見た世界	増補アインスと相對性理論	社會政策と階級闘争	社會運動と勞銀制度	長篇小説 懷疑者の群	北郊雜記	星から星への通路
上四六製版 送料拾五錢	上四六製版 送料拾五錢	上四六製版 送料拾九錢	上四六製版 送料拾五錢	上四六製版 送料拾七錢	並四六製版 送料拾九錢	上四六製版 送料廿壹錢	上四六製版 送料拾七錢	上菊中製版 送料拾五錢	上四六製版 送料拾七圓

室伏高信著	靈の王國	上四六製版 定價壹圓五十錢 送料十五錢
文學博士 米田庄太郎著	現代文化人の心理	上四六製版 定價貳圓七拾錢 送料拾九錢
パートランド ラツセル著	愛國心の功過	上四六製版 定價壹圓八拾錢 送料拾五錢
山川均著	レーニンとトロツキ	上四六製版 定價壹圓九拾錢 送料拾五錢
片山潜著	自傳	上四六製版 定價壹圓八拾錢 送料拾五錢
文學博士 榑 保三郎共 醫學博士 岡 存著	スマイ ナハ 若返り法研究	上四六製版 定價壹圓參拾錢 送料拾參錢
醫學博士 榑 保三郎著	學齡より 丁年迄の 精神發育研究	上四六倍版 定價四圓廿七錢 送料廿七錢
文學博士 米田庄太郎著	リツケ ルツケの歴史哲學	文化哲學叢書 第一編 定價四圓七拾錢 送料廿三錢
文學博士 板垣鷹穂著	新カント派の歴史哲學	文化哲學叢書 第二編 定價壹圓五拾錢 送料拾五錢
ラツセル 宮本鐵之助譯著	數理哲學概論	上四六製版 定價貳圓八拾錢 送料拾九錢

506

237

終